

菱田海鷗と大垣詩壇（五）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2013-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 徳田, 武 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/14855

菱田海鷗と大垣詩壇(五)

徳田 武

本稿は、『明治大学教養論集』四六四号「菱田海鷗と大垣詩壇」(四)を承けるものである。

七十一 鉄心・海鷗の上洛

慶応三年(一八六七)は、鉄心五十一歳、藤陰四十一歳、海鷗三十二歳である。

正月二十日、例の蘇軾の出遊に倣って、鉄心・藤陰・金粟・市川東巖・海鷗・傍島甘谷・菅竹洲は、梅を荒尾村に行き、蘇軾の「正月二十日、往岐亭、郡人藩、古、郭三人送余于女王城東禪莊院」の第六句「半瓶の濁酒君を待って温む」を韻字として、それぞれが五絶を七首ずつ作った。鉄心に、「丁卯正月二十日、藤陰・金粟・東巖・海鷗・甘谷・天遊・竹洲と共に三たび梅を荒尾に観る、東坡の半瓶の濁酒君を待って温むの句を以て、韻と為し、各の七絶句を作る」(『遺稿』七)がある。藤陰にも「丁卯正月念一日、出遊、以東坡半瓶濁酒待君温句為韻、同鉄心・西溝両大夫及江金粟・菱海鷗・僧春堂賦、各得五絶七首」(『遺稿』一)がある所を見ると、他に高岡西溝・僧春堂もいたようである。なお、その題中の文字が「念一」に作られているが、「一」は衍字であろう。

この時、鉄心たちは城北岡山の鳥居研山の墓に詣でたが、武事を好んだ研山を偲んで、鉄心は次の詩を作った。第六首で、「研山の墓を吊ふ」という注が付されている。

風塵何又惨 風塵 何ぞ又た惨たる

兵士歳従軍 兵士 歳ごとに軍に従ふ

一盞墓前酌 一盞 墓前に酌ぐ

九泉欲起君 九泉より 君を起さんと欲す

戦乱がまたもや何とひどくなってきたのか。

兵士が毎年軍に従って赴く

一杯の酒を研山君の墓前に注いで祭り、

冥土から君を呼び起そうと思う。

藤陰の七首がすべて梅に関する詩であるのに対して、あれほど梅好きな鉄心が梅から離れて戦争について詠じている所を見ると、この頃の鉄心の脳裏には時事への思いが充満していたのであろう。

この観梅の帰途、鉄心と桃壺禅師および海鷗が、平山耕雲の家を訪れた事が、鉄心の「帰途、桃壺禅師及び海鷗と同一耕雲の居を訪ふ」(『遺稿』七)によって知られる。耕雲は、通称は五郎八、別に蒼峰と号した。藩老大高氏の従臣で、南寺内村に住んだ。金鋸工・鍛鉄・刀鑑を得意とし、砲丸鑄造の術を学んで、藩の鑄丸師に選ばれた。また花卉を描く

の得意としたという（『新修大垣市史』通史篇一、八二六頁）。

この慶応三年五月には、兵庫港の開港が勅許され、大坂が開市された。八月、幕府は大坂市中を嚴重に取締る必要を認め、大垣藩にその警備を命じた。鉄心の養子である小原忠^{ただみち}迪（睢陽と号す）は時に軍事奉行であったが、総隊長として藩兵約五百名を引率して、九月一日、大坂へ向けて出発した。（『新修大垣市史』通史篇一、七七七頁）。時に野村藤陰は、「小原睢陽君の軍に浪華に之くを送る序」（『藤陰遺稿』三）を撰して、忠迪を励ました。それは長柄川の鵜飼の漁匠が巧みに鵜を操る事になぞらえて、「大将」が軍を統率する事の重要なを述べた文章である。勿論、京都の警備も命じられた事であろう、後述するように鉄心は九月末に兵を率いて京都に入っており、海鷗も同行している。それ以前、八月には、大垣藩は藩政を改革し、従来の政治・軍事二局のほかには評定局を新設していた。ちなみに軍事局は前年十一月一日に設置され、洋式の軍事訓練を行っている。

慶応三年の秋九月、鉄心は、その年の八月十六日に、近江彦根の禪寿山清涼寺に移錫した雪爪に下男を遣って言わせた。

「師は、ただ今、江州におり、氣候は霜の頃で、越溪の楓が見ごろです。私は「去秋」（文久三年秋を言っている）であろう。第三十八節参照）遊んだ事がありますが、大層、景色が素晴らしいと思いました。越溪は禪寿山と僅かに数峰を隔てているだけです。近ごろ私は、命令を受けて兵を率いて京都に入りますが、師がもし、楓見物をなさるのなら、道のついからですから、半日ほど同行なさったならば如何ですか」

越溪の楓の事は、雪爪もよく耳にしているので、期日を約束して、下男に告げた。九月二十八日、二、三の雲水に従って出かけ、高宮に到ると、鉄心が馬を走らせてやって来た。菱田海鷗も、すぐ後から追いついた。話しながら歩き、夕方、愛知川に着いて宿に入った。鉄心が酒を命じて、越溪の楓の素晴らしさを語るのので、雪爪も期待に胸をはずませる。

午前四時、寢床で食事を取ってから出発した。二里ほど行くと、空が明るくなり、そこで鉄心と別れ、海鷗たちと路を村落に取り、左折すると、樹にはすべて霜が降りており、赤い柿の実が枝もたわになり、秋の気配が満ち満ちておる。更に数里行き、高野村に入る。間近に溪の入り口を眺めると、一水が山を繞って、俗界とは異なる事が知られる。錦欄橋を渡って溪に入り、数時間歩き廻る。楓の黄色が多いものは、大むね樹齢数百年以上で、溪南に入り、水を隔てて眺めると、楓の葉が水に映り、碧い流が夕焼けに染まっている。仰いで山の頂きを見ると、夕日は反射していて、まるで金の蛇が雲の間に長く横たわっているようで、越溪の素晴らしさは、ここに極まっている。そこで、地面に敷物を敷いて坐り、紅葉を焚いて茶を煮、久しく鑑賞しておった。

それから永源寺に行った。寺は寂室禪師の創建である。禪師は元に入って法を伝え、朝廷が礼待した、当時の高僧である。禪師が東福寺に居った時、「通天橋上殊に感多し、紅楓の為に夕陽に立たず」という偈を作られた。



『山高水長図記』中「越溪雲錦」

ただ今、感吟すると慚愧の念にたえない。私は、寺主に会わないで去った。侍僧が笑って言う。「いわゆる「竹を問ふて主人を問はざる者」ですか」

午後十時、愛知川の宿に戻り、灯をにかけて海鷗と観楓詩を数枚に書し、鉄心に郵便で送った。それから酒を命じて一酔した。

三十日の早朝、出発した。私は寒気を恐れ、駕籠に坐して衾をかかえていると、駕籠昇きが不意に叫ぶ。

「星の雨が音を立てて降っていますぜ」

同行の者は皆驚いて兵乱の兆しとした。正午近く寺に帰った。

以上は、『山高水長図記』中、「越溪雲錦」を訳したもののだが、これに拠れば、鉄心は九月二十九日、海鷗は一日を置いて、九月三十日に京都に赴いている事が判明するのである。結末に「兵兆」を書き留めているように、京都ではその頃、薩摩・長州・土佐・安芸などの諸藩が討幕や大政奉還の計画を進行させていたが、この時の海鷗の在京中の詩も、次に見る如く、時局を色濃く反映する事になる。

七十二 京都滞在中の詩

海鷗の京都滞在の様子は、「上洛、述懷（慶応丁卯、三十二歳作）」「慶応丁卯歳、書感」「京都雜詠（一首慶応丁卯作）」等の詩によって窺う事ができる。

「洛に上り、懷を述ぶ」は、次のような詩である。

投筆仗長剣 筆を投じて 長剣に仗り

飄零遊帝京 飄零して 帝京に遊ぶ

潛身交浪士 身を潜めて 浪士に交わり

画策謁公卿 策を画して 公卿に謁す

港水腥風起 港水 腥風起り

閑雲殺氣横 閑雲 殺氣横たはる

青衿君莫笑 青衿 君笑ふこと莫かれ

魏相亦書生 魏相も 亦た書生なりき

筆を捨てて、長剣を佩び、

さすらって、皇のおわす京都にやって来た。

身分を隠しては浪士たちと交わり、

公家に面会しては政策を論じあう。

兵庫港には洋夷の起すなま臭い風がただよい、

閑所のあたりの雲には戦争の気が満ちている。

私が無力な書生だと、貴君は笑わないで下さい。

「青々たる子が衿」と詠じた魏の曹操も、若い時は一介の書生だったのです。

「筆を投じて戎軒を事とす」（「述懷」『唐詩選』一）と詠じた、唐の魏徴や魏の丞相曹操のように、慷慨の志を存した詩であるが、頷聯に着目すると、海鷗は京都で警備を勤めていたというよりも、何か諜報活動をしていたように受け取られる。もっとも、多少の文飾が加わっている表現であろうが。また、「港水」は、珍しい語彙であるが、やはり兵庫港を洋夷に開港したことを踏まえて言ったのであろう。

「慶応丁卯歳、書感」は次のような詩である。

世局將多事 世局 將に多事ならんとす

紛紛巷說譚 紛紛として 巷説かまひす譚し

天符無故降 天符 故無くして降り

星變逐時加 星變 時を逐ふて加はる

閱武先冬獵 武を閲すること 冬獵に先んじ

催租又晚衙 租を催す 又た晚衙

此生愧儒服 此の生 儒服を愧づ

殖産勸蚕麻 殖産 蚕麻を勧めん

世の中の動きは、次第に事繁くなろうとしており、巷では、様々な噂がかまびすしい。

空からはお守り札が訳もなく降って来、

天文の異変は時がたつにつれて増えている。

冬であるのに軍事訓練が狩猟よりも優先され、

歳末であるのに、役所はまたもや税を取り立てる。

世に無用な儒者として生きている事が恥かしい。

殖産のために養蚕と農耕を勧めよう。

第三句には「近時、天符の各処に降ると伝へ言ひ、俚俗は以て革命の吉兆と為し、街頭に歎舞す」という自注があり、慶応三年八月に名古屋地方から始まって、翌月には東海道・江戸・京畿その他一円に拡大した民衆の狂乱「ええじゃないか」を詠み込んでいることが明らかである。頸聯を見ると、冬期の作であろうと考えられ、慶応三年冬の、庶民を逼迫させる政局と、杜甫のようにそれを憂うる作者の心情とが詠ぜられているのである。

「京都雑詠二首」の第一首は次のような作である。

昨日橋欄首 昨日は 橋欄の首

今朝沙磧屍 今朝は 沙磧の屍

但道天加罰 但だ道ふ 天の罰を加ふと

不知誰所為 知らず 誰の為す所なるかを

鬼談喧里耳 鬼談 里耳に喧しく

悲曲咽絃糸 悲曲 絃糸咽ぶ

志士狂花柳 志士 花柳に狂し
明夷奈此時 明夷 此の時を奈せん

昨日は橋の手すりの下に首級がころがっており、

今朝は河原に死体が横たわっている。

その傍らには、ただ「天これを誅罰す」と書いた札があるだけで、

誰の仕業やら知れない。

死者についての噂話が衆人の間にかまびすしく伝えられ、

三味線の糸がむせぶような悲しい曲が流れる。

勤皇の志士たちは花柳界にのめり込んでいるが、

この光明が掩われた時勢を如何にしたら良からうか。

幕末京都の殺伐たる世相を如実に伝えた詩、といえよう。第二首は次の如くである。

交游皆志士	交游は	皆志士
徴逐弄年華	逐徴	年華を弄す
紅袖鴨涯月	紅袖	鴨涯の月
金鞭嵐峡花	金鞭	嵐峡の花

悲歌頻拔劍 悲歌 頻りに劍を抜き

戲墨只塗鴉 戲墨 只だ鴉を塗るがごときのみ

嘗胆深宵苦 嘗胆 深宵に^{にが}く

醉眠蘇小家 醉ひて蘇小の家に眠る

交わり遊ぶ者は、すべて志士であり、

招いたり招かれたりして、歳月を費やす。

鴨河べりで美人と月を眺め、

馬に鞭打って嵐山の溪谷に花を見に行く。

何度も劍を抜いて舞いながら悲壮な歌を唱い、

戯れに筆を執るが、鳥のような下手な書を書きつけるばかり。

深夜まで^{にが}苦い胆をなめるような辛苦をかさね、

酔って蘇小小のような名妓の家で眠る。

前の詩に対して、こちらは海鷗自身の生活ぶりを、やや劇的に潤色して詠じた作、と読めるが、志士と交って情報を収集し、そのためには酔って劍舞と揮毫を行い、美妓を擁して月見をする、というような事も無くはなかったであろう。よく言われるような、勤皇の志士の生活と大きく変らない生活をする事も、時にあったであろう。なお、蘇小小は、南朝齊の錢塘の名妓である。

七十三 「月落ちて天を離れず」

慶応三年の十二月、鉄心と海鷗は、近江の清涼寺に雪爪を訪れた。その事について、雪爪は『山高水長図記』下「墨梅感旧」に、次のように記している。

私はある日、海鷗と懐旧談をしていて言った。「私と君とは、鉄心と莫逆の交りだった。鉄心は普断、戯れに私を仏印和尚に見なしていたが、たぶん自分は蘇東坡をもって任じていたのだろう。また君を杜牧と見なし、自分は牛僧孺（杜牧の庇護者）だと思っていたのであろう。そして唱和した詩文は常に机上にうず高かった。だが、その当時の詩文稿はすべて人に持ち去られてしまって、断簡零墨も留めていない。人情は近きを軽んじ遠きを重んずるものだが、感無きを得ない」

海鷗が、「そうですね」と答えた。

この問答を、ある客が傍らで聞いていて、その翌日、墨梅一幀を贈って、言う。

「これは鉄心翁が、昔、師（雪爪）の座において作った物で、鉄心翁みずから題して、『余、墨梅を胸に横たふこと十年なり矣。今始めて筆を下すに拙なること甚し。然れども自負する所も亦た拙に在るのみ。天下に此の拙を愛するもの或は在らん焉』とあります。この事について雪爪・海鷗の二友にお尋ねしたいものです」

後日、海鷗が見に来て言った。

「鉄心殿の交遊の多さは、天下を傾けるほどです。だが、心を許し、師として尊んだ者は、たった三、四人ほどで、師はその一人です。想い起せば、雪の降る夜、鉄心殿に随って、師を近江の清涼寺に訪れた。丁度、幕府の末期に際し、

物議が沸騰している時である。鉄心殿は、師に治安の策を問うた。師は答えようとはせず、ゆっくりと鉄心殿に香を焚いて静坐させた。堂の内は真っ暗で、灯が青く輝いている。鉄心殿がやおら大喝する。師は声に応じて棒を振るい、その肩を打って言われた。

『月落ちて天を離れず』

鉄心殿は言下に頓悟なされた。鉄心殿が師に大機を相談した上で、心を国事に尽した事は、この一事に就いても知られる。

鷲津毅堂は嘗て言った。

『雪爪師の一棒は能く老鉄をして中興の名臣たらしむ、則ち雲門の三十棒に勝ること万万』

ああ、鉄心殿は、昔から梅を命となさっていた。今、この墨梅に向うと、音容に接するようだ。このような事を思い出したが、師はまだ憶えておいでですか」

私は、この言葉を聞いて感に耐えず、そこで筆録した。

右は、明治の世になって、鉄心の没後に雪爪と海鷗が追憶談をしたものを筆録したのであるが、前述したように、雪爪が清涼寺に移錫したのは慶応三年の八月のことであり、翌年の冬には既に明治元年になっているから、「時は幕府の末運に属す」とは、慶応三年の十二月九日、朝廷が王政復古を宣言した頃、と考えられるのである。

徳川家に縁の深い大垣藩と鉄心らは、見て来たように、徳川幕府に忠実に仕えており、一方で鉄心は、思想的には尊皇論者であるから、大政奉還・王政復古が実現されてゆく過程を京都に在って身をもって感じている事は、非常に辛い事であったに違いあるまい。鉄心のそうした悩みを、『鴻雪爪翁』の著者服部空谷は、「此の時朝幕の板挟みの苦境に立っ

てゐたのであるが、今御一新に逼りていよいよその向背を決せねばならぬ羽目に至った」（三三頁）と述べているが、向背を決するのは、もう少し先の翌慶応四年一月十日頃の事になるとしても、板挟みの心境であつた事は確かであろう。そこで、そうした悩みを雪爪に打ち明けてみせたのであらう。雪爪が応じた「月落ちて天を離れず」の句は、まさに禪問答で、何の事やら分りにくい、月が幕府を、天が天朝を指していると取るならば、幕府は滅亡しても、朝廷に吸収されてゆく、というほどの意を寓していた、と解釈できるのである。この解釈が妥当であるとすれば、この時の雪爪との面晤は、鉄心に大垣藩の帰趨を予測させる上で非常に大きな影響をもたらしたのではないか、と考えられるのである。

海鷗とともに京都へ戻った鉄心は、十二月九日、朝廷が王政復古を宣言した事を知って、「慶応三年丁卯の冬、輦下に在りて偶ま此の詩を作る」（『遺稿』別録「朝天余稿」）と題する七絶を詠じた。

共仰政權帰帝朝	共に仰ぐ	政權	帝朝に帰するを
遺賢拔擢及漁樵	遺賢を拔擢して	漁樵に及ぶ	
若將世態比花候	若し世態を將って	花候に比すれば	
是此春風第一朝	是れ此ぞ	春風	第一の朝

政權が朝廷に戻った事を万民がともに仰ぎ喜んでゐる。

朝廷は野に隠れた賢人を拔擢して、漁師や木こりにまで眼をくばって下さる。

このような世相を、もしも花便りに喩えるならば、

この日こそ第一番の春風が吹く朝なのだ。

政権が天朝に帰して、朝廷が広く人材を諸藩に徴して国事に参加させようとしている事を、素直に喜んでいるのである。右の承句で言う通りに十二月十九日、朝廷が京都詰の大垣藩留守居役を呼び出して、小原二兵衛（鉄心）の登用を仰せ渡された事、それは正親町三条公（嵯峨実愛）や松平春岳の推薦によった事などは、『小原鉄心伝』二二三頁に記されている。そうすると、右詩は、十二月十九日の仰せ渡しを受けてから詠じたのだ、とも考えられるのである。

しかし、幕府の旗本の士は大政奉還を喜ばず、十二月十二日、二条城から大坂に撤退していた徳川慶喜に対し、上京して君側の奸を清める事を勧めていた。江戸に在っては、十二月二十三日、江戸城の二の丸が消失したが、それは薩摩藩士の放火による、と言われていた。二十五日には、今度は薩摩藩の江戸邸が焼打ちにあうが、これは幕府の士の報復であった。このようにして翌年の正月三日・四日に鳥羽・伏見の戦い、否、のみならず、全国的に戊辰戦争が起る前兆が、歳末には萌していたのである。

そのような不穏な情勢の中、その年の除日、即ち十二月三十日は風雪が俄かに起る日であったが、鉄心は、土佐藩の長岡懐山とともに梅を東山に探りに出かけた。（除日、同「土州長岡懐山」探「梅於東山」、風雪驟下」『遺稿』別録）。懐山は、通称は謙吉、坂本竜馬の配下となり、海援隊の書記として活躍した人であり、時に三十四歳であった。

上国治安策将決 上国の治安 策将に決せんとす

又聞関左羽書馳 又た聞く 関左 羽書馳すと

大瓢提得問梅去 大瓢 提げ得て 梅を問ひ去り

咲對臘中春一枝　咲って對す　臘中の春一枝に

京幾を安らかに治めるための政策は、今や決定されようとし、

一方、江戸方面では戦鬪の知らせが頻りに発せられていると聞く。

我々は酒を入れた大瓢筆を持って梅花の咲き具合を見に出かけ、

歳末に笑いながら、春を告げる枝に向かいあっている。

上国の治安の策とは、小御所会議で、徳川慶喜に辞官と納地を命じたが、一方、慶喜も公議派の会議に参加できる資格を得た等の事を指すのであろう。新たに起る戦乱の兆しを感じながら悠然と探梅に出かける理由は、第二首に窺う事ができる。

百年如夢事多非　百年　夢の如く　事多く非なり

儘把興亡付大機　儘まま　興亡を把りて　大機に付す

除日探梅若王子　除日　梅を探る　若王子

横風捲雪撲糞飛　横風　雪を捲き　糞を撲ちて飛ぶ

百年も夢のようにはなく過ぎ、大概の事はままならぬ。

よって、政権の興亡も天の大いなる運行にまかせておく。

大晦日、若王寺（相楽郡精華町大字下粕小字林前町）あたりに梅の咲き具合をさぐっていると、横なぐりの風が雪をまき起し、叢に吹きつける。

右の起承二句は、世の中の事は人為の自由にならぬ以上は、幕府と朝廷の政權交替という大變動も、天の意思にまかせる、という鉄心の処生哲学を語ったものであって、この哲学あればこそ、彼は、まさしく幕末の風雲時に在って悠然と探梅に出かける余裕を保持していたのであろう。こうして右の二首は、幕末の騒然たる世相に在って悠揚迫らぬ鉄心の面影を感じさせるのであるが、鱸松塘も同様な感を、「二篇俱に是れ鉄心君の本色、その酣余大踏歩して来るを見るが如し」と評している。

七十四 鳥羽・伏見の戦

慶応四年は九月八日に明治元年となる。鉄心は五十二歳、藤陰は四十二歳、海鷗は三十三歳である。

前述したように、鉄心は前年の十二月十九日に朝廷より召し出されていたのであるが、その許可を藩主と幕府とに伺い出していたので、両者の許可を得て、御所に参上したのは正月三日の事であった。議定職の諸卿は鉄心に参与職を授け、御所の階を降りたのは真夜中であったが、彼は夕刻から南方に砲声が殷々と轟くのを聞いていた。即ち鳥羽・伏見の戦の勃発である。「戊辰正月二日（ママ三の誤り）、寛、恭しく朝令を奉じて参与職に任ぜらる」（『遺稿』別録）に言う。

誰図徵命及微臣 誰か図らん 徵命 微臣に及ばんとは

正是風雲際會間 正に是れ 風雲 際會の間

奉詔三更初下殿 詔を奉じて 三更 初めて殿を下れば

礮声来拔洛南山 礮声 来り抜く 洛南の山

思いきや、朝廷のお召しがつたない私に及ぼうとは。

この日こそまさに風と雲がまじり合つて波瀾を起す時であつた。

私が詔を受けたてまつりて、真夜中にやつと玉階から降りると、

京都の南方の山から砲声が轟いて来る。

結句には、「此の日、伏水の戦、始めて起る」との自注があり、維新史における重要な瞬間に遭遇した事を語るものである。

鉄心は正月三日から五日まで御所にずっと詰めていて、退出しなかったのであるが、三日に桐山純考と海鷗を淀の小原兵部の陣中に遣り、慎重を持するように説いた事、海鷗らは四日に京都に戻った事などは、既に第一節で述べた。三日には、大垣藩の兵は鳥羽街道に出て、ここに始めて官軍と戦を交えた（『正月五日作二首並引』（『遺稿』別録）の引に「余、朝に在りて退かざること三日、時に聞く吾が大垣兵、大坂より進みて淀城に到り、官軍と鳥羽に戦ふと。慨歎に堪へず、乃ち此を賦して懷を述べ」と）。五日朝には、三たび、角力の荒川宗五郎（抱えの中間代りの者）に書簡を持たして、兵部のもとに届けさせた。その全文は、『小原鉄心伝』二一六・七頁に紹介されているが、既に皇子仁和寺宮が総督として錦旗を押し立て出陣しているからには、大垣藩の「大義」としては、「徳川御家に違背者、相成不申」、

また「錦旗に對し発砲、是亦屹度不相成」、これまたきつとあいならず、そうである以上、「内府公(徳川慶喜)膝前に迫り、死を以って直諫の外、有之問敷と存候」と、慶喜公に戦闘をやめさせる事である、と諭したものである。(右書簡の写真が昭和十六年、岐阜県立図書館・大垣市立図書館発行『郷土勤皇家遺芳帖』六十七頁に掲げられており、小原男爵家蔵とある)その具体的な策としては、慶喜が一、二人の従者を伴って宮中に参内し、叛意なき事を奏上するのが良い、とまで懇切に指示している。つまり、落ちた月をして天より離れしめない事である。

このように大垣藩が官軍と戦わない事を願っている鉄心にとつて、五日に耳に届いた情報には困惑させられるばかりで、そうした心情を次のように詠ずる。

大義我兵曾所推 大義 我が兵 曾て推す所
何由今日戦端開 何に由りて 今日 戦端開く
楚氛遮面漫漫黒 楚氛 一面を遮りて 漫漫として黒く
翻認官軍仇視来 翻て官軍を認めて 仇視し来る

我が大垣藩は、従来、大義を推進して、朝廷をたてまつってきた筈だ。
なのに、どうして今日、官軍との間に戦争を始めるのか。

賊の悪しきもやが黒くはびこつて我が兵の面を遮っているのだ、
官軍を逆に仇敵として認識するようになったのだ。

転句の「楚氛」は、俗悪の氣を言うのに用いられる語（『左伝』襄公二十七年）だが、右書簡で「薩長とても、此度の罪魁は一、二藩に帰し候、との論にて」と言う一、二藩のことを指していよう。具体的には、鳥羽・伏見の戦を首唱していた桑名・会津の両藩を言っているもの、と考える。我が藩は桑・会両藩に誤まれたのだ、という痛恨の思が一首全体に貫かれている、と読めるのである。なお、起句の「兵」については、「藩」と改めた方が可だ、と小野湖山は評している。

第二首は次のような作である。

錦旗已及澱江潯 錦旗 已に及ぶ 澱江の潯に

尚聴礮声振上林 尚ほ聴く 礮声 上林に振ふを

遥望洛南炎焰赤 遥かに望む 洛南 炎焰の赤きを

自疑写我欲燃心 自ら疑ふ 我が燃えんと欲する心を写すかと

官軍は錦の旗を押し立てて、既に淀川の岸にまで迫っているのに、

なおも御所まで砲声が轟いてくるのが聞える。

遙か京都の南に炎が赤く映えているのを眺めると、

私の燃えんばかりの赤心があそこに写し出されているのかと疑われる。

転結句は、徳川を憐み、息子兵部を心配し、朝廷の将来を憂えて、沸々とたぎる想いの熱さを、戦火の色になぞらえ

たものであらう。

一方、海鷗も正月六日に与惣兵衛と一緒に兵部のもとに遣わされ、長州藩士に捕えられ、危く斬首されそうになり、絶命詩を吟じて赦された事等は、第一節に詳述した。『大垣ものがたり』文化財委発足十周年記念号・海鷗先生七十年祭記念号には、海鷗書綴が紹介されるが、その第二書綴は、この六日早朝、使いに立つ前に認めて、大垣の河地善四郎に向けて発した物、と考えられる。

(御書表書ハ宿先よりと御認下さる可候。小原二兵衛様御内菱田と申二てよろしく候。) 戦塵中、僕、大義論ヲ吐キ、天下ノ安危ヲ苦心仕居候て、頗壮健、御安心下さる可候。伏見は大半焼失ナリ。鳥羽街道モ焼失ナリ。淀城過半焼落ナリ。薩長土三藩之兵、見事戦ヒ申候。関東勢ハ敗北ナリ。今日ニして英雄之時ト大喜いたし候。御笑想下さる可候。社中諸君、並ニ三吉・力松・梅之、其外之婦へも皆ニよろしく御伝声下され、みやげに首ハ面白からず候故、大丸店の物でも持て帰りたく、御たのしみ下され候と、極内に御通声下さる可候。

六日晩

海鷗

河地兄

醉花主人

何ぞうまいもの些々御遣し下さる可く頼入候。

この書簡により、海鷗が鳥羽・伏見戦争の間も鉄心と尊皇佐幕論を激論していたらしい事が推察される。また、三吉・力松・梅之は、大垣で海鷗が親しくしていた芸妓たちであつたらう。海鷗は、その日の午後、自己を襲う運命の事など、

全く気づかず、呑気にも帰藩後、芸妓たちに贈る京土産の事など考えていたのであった。

海鷗は、七日に鉄心のもとに戻り、長州藩が既に官軍として大義の上からも戦闘状況の上からも優位に立っている事を詳しく報告した事であろう。前述したように、海鷗の報告を聞くまでもなく、鉄心も元より今や幕府軍が賊軍に転じた事、幕府軍に大垣藩が加っていた事が大義に背く事は、十分に承知している。そこで鉄心が、八日、朝廷に、暫時休暇を取って、主君戸田采女正（氏共）^{うじな}を勤皇に翻意させるよう説得するために大垣に出張する願を出した事、それが正親町実愛・岩倉具視両議定に許可された事も、『小原鉄心伝』二二九頁に詳しい。

翌九日朝、鉄心は桐山純考と海鷗とを伴って京都を出発し、夕刻、磨針峠^{すりはり}に到った。そこから紺碧な水をたたえた琵琶湖に夕日が映るのを眺めているうち、感慨が生じて、鉄心は湖樓の壁に詩を書きつけた。（正月九日、京を發し急に大垣に赴く、路、磨鍼嶺を過ぐ、筆を援りて湖樓の壁に題す」『遺稿』別録）

路到磨鍼感忽生 路 磨鍼に到りて 感忽ち生ず

馬頭遠水夕陽明 馬頭の遠水 夕陽明かなり

掃除天下兵塵了 天下の兵塵を掃除し了りて

与此湖光一碧平 此の湖光と 一碧に平かならん

磨鍼峠まで旅して来て、ふと感慨が生じた。

馬の鼻さきに遠く見える湖水は、夕陽に明るく輝いている。

その感慨とは、天下の兵乱をすっかり片づけてしまつて、

この光る湖面と同様に一樣に紺碧に（美しく）平かにしたい、という事だ。

大垣藩は勿論の事、これまで幕府に忠節を尽してきた会津・桑名藩などが更に官軍に対して抵抗する事は、大義に背くし、痛ましいことでもあって、幕府側諸藩が矛を納める事を鉄心は切望していたのである。

鉄心が正月十日、藩論を勤皇に決定させ、十二日夜、兵部の率いる藩兵を垂井駅で出迎えた事等も第一節で述べた。この日、藩主氏共公は、朝廷に対して恭順の意を表し、京都警衛を勤めるため、上京の途についた。前述したように、鉄心は、兵部たちを大垣の各寺院に禁錮させた後、藩主の後を追ひ、藩主に追いつき、更に十四日、藩主に先立って入京し、十五日に帰京御届書を提出した。これより先、正月十三日、大垣藩は賊徒追伐の東山道鎮撫御勅使の先鋒を命ぜられていたが、鉄心はこれを承けて、同じく十五日に、二つの建議を朝廷に上申している。その一は、「御追伐御鎮撫一体之御主意ヲ、豫テ奉_ニ伺置_一度」（『復古記』二十。明治元年正月十五日）という事で、佐幕軍征伐の大義名分を表明するよう願ったのである。その二は、「御征討之御軍律御鎮撫之御律令を御一定ニテ、其御書面ヲ諸手へ御渡ニ相成候上、諸道一時に御発向」するよう献策したのである。諸軍が共有する軍律を定め、また諸軍が足並みを揃える事は、戦略上重要な事で、軍学を学んだ鉄心でなくては、なかなか気のつかない問題であろう。だが、鉄心がもっと言いたい事は、戦争に拠らず、平和裡に佐幕軍を降服せしむる事であって、翌十六日に、再度の建白を上申している。それは、「御鎮撫之義に就テハ、干戈を用ヒズ、先彼ヲシテ公道に甘服セシムルヲ以テ、御聖算之第一義と奉_レ存候」（『復古記』二十。明治元年正月十五日）に言明されている。そして、その為の方策として彼は「朝廷之御新正、徳川氏之得失」を明らかにした「公明至正之御檄文」を会議の上で作り、これを上梓して、あまねく布告するよう提案する。すなわち、情誼の厚い鉄心は、三百年の恩顧を蒙った幕府を一朝、弊履を棄てるように見限る事には耐えられずに、このような二

度に亘る建議を行ったのである。更に、十七日には、三上藩主遠藤胤城たねきへ宛てて、徳川慶喜へ建言する書を作り、「朝廷に只管御謝罪」するのが「徳川御家御相続の御上策」である、と述べた。つまり鉄心は、戦争を回避するために、朝廷と幕府の双方に働きかけていたのである。この建言書は、市川東蔵の子元之助に託されて、昼夜兼行、京都から江戸へ送られたが、鉄心の尽力は徒勞に終って、慶喜の上京謝罪は実現せず、一月二十二日、東山道鎮撫総督岩倉具定・副総督岩倉具経は京都を出発し、大垣藩兵がその先鋒となり、尾張・土佐二藩の兵などがこれに従った（『復古記』二十四）。ついで二月三日には関東親征の詔勅が発せられ、九日には有栖川熾仁親王たるひとが東征大総督に任命される。このように大垣藩兵が東山道鎮撫軍の先鋒となるので、鉄心は、藩兵の兵糧や軍費の手配をする必要を思い、正月二十日、またもや大垣に帰る願いを岩倉具美へ提出している（『復古記』二十三）。次のようなものである。

此度 官軍、東山道へ御発向ニ付テハ、兵糧其外御軍費等之儀、其御手配モ被_レ為_レ在候御事ニハ可_レ有_二御座_一候へ共、美濃路辺儀ハ、当手へ御不都合無_レ之様可_レ仕旨、此間中御沙汰モ御座候間、私儀一応立帰_リ、大垣迄罷越_ス、右之手配仕置申度奉_レ存候。是モ会計事務之一端ニ御座候間、何卒早々、暫時之御暇被_二下置_一候様、偏ニ奉_二願上_一候、已上。

正月二十日

小原二兵衛

このようにして鉄心は、この頃、頻繁に京都と大垣を往復しているのであるが、その「重ねて京に入る」（『遺稿』別録）は、右の関東親征が決定した頃、即ち右の大垣における手配が済んで、また京に戻る頃、に作られた詩であろう。

兵氣忽移東海浜

兵氣 忽ち移る 東海の浜に

入京重酔鴨厓春

京に入り 重ねて酔ふ 鴨厓の春

誰知燕趙悲歌客 誰か知らん 燕趙 悲歌の客

総作陽台夢裡人 総べて陽台夢裡の人と作らんとは

戦いの気分は、にわかに東国の海浜（江戸）に移動した。

私は京にまたもや入って、鴨川の春景色の内に酔を尽している。

思いきや、勤皇だ佐幕だと悲憤慷慨していた志士たちが、

今やすべて妓楼で歓楽の夢を食う人となろうとは。

戊辰の春を迎えて、それまで殺伐の気がみなぎっていた京都の雰囲気が一変した事を、右の詩は伝えているのである。

七十五 会計事務局判事

これより先の一月十七日、鉄心は、徴士たるべく仰せつけられ、また、新政府の会計事務掛を仰せつけられていた（『百官履歴』二一）。徴士とは、唐土においては、朝廷から招かれながら官職につこうとしない高人をいうが、この場合は、政府に登用されて官に就いた藩士の称である。ついで二月二十日には、徴士参与職会計事務局判事を仰せつけられた。大垣藩の疲弊せる財政を救った手腕が買われての事であるが、同時に藩論を勤皇論に転換させた功を評価されたからであろう。同じ日、越前藩の三岡八郎（由利公正）も同職に任命されている。公正は、前年の慶応三年十二月十

八日に夙に徴士参与職に任ぜられていたが、明治元年正月二十一日、紙幣製造の議を上申、衆議紛々、二十三日によろしく製造の決定を見、公正にその事を掌らしめるのであるが、（『復古記』二十四）、これが後に鉄心が退職する遠因となる。が、この頃は鉄心はそこまで思い到らず、「懷を述ぶ。時に余が官、会計判事を撰ぬ」（『遺稿』別録）を作っている。

更始政權無定衡 更始の政權 定衡無し

百端事去百端生 百端 事去れば 百端生ず

立参計府心平易 立ちどころに計府に参ず 心平易なり

天地水流雲又行 天地 水流れ 雲又た行く

新たに始まった政府というものは、定まった規律が無く、

いろいろな問題が済んだかと思うと、また生じる。

私はたちまち会計局の役人となったが、その心は平靜だ。

それは、この天地は、水が流れ、雲も行くというように、自然に運行しているからだ。

右の如く、結句は、天地のおのずからなる運行に随順するという態度を言っているもの、と解することができるのであるが、そうとすれば、それは前引した「除日、土州の長岡懷山と同一……」第二首の承句「俛ま興亡を把りて大機に付す」と同様の態度である、と言う事ができ、それがこの頃の鉄心の処世哲学になっている、と言えるのである。

会計局の参与となった鉄心は、京都に住宅を構えて、落ち着いて仕事しよう、と考えたらしい。その事について、同

僚の三岡公正は、三月下旬頃の話として次のような物を伝える。

當時京都は、みな土蔵に目塗をしてしまつて、三月の末になつても目塗を外^はつした家は一軒もない、そこで私は同僚の者と相談したことがある。それはその時分、會計判事小原仁兵衛が京都に住居をして最早普請をしようと思つて木の切組までしたが、その場になつて家を建てずにをつたから、甚だ幸ひであるから立派な座敷を建てると云ふと、同人は勤厚の人なれば遠慮して、こんな時に座敷を建てる氣にならぬと云ふ。そうでない、これは國家の爲に建てるのであるから遠慮に及ばぬから建てよと云つても建てぬ。どうも仕方がない。又その時分私は頻りに大和から伊勢路、江州からあの邊に人を出して御用金を募るけれども、さつぱり出ぬ。仕方がない。

その時は私は御池の油小路にをつたが、銀座屋敷にゐる空地に普請をしやうと思ふて、立派な座敷を建てると命じて大げさに地形を始めた。突飛な話だが、地形をしてそれから人足に酒でもくれてやり掛ると、あの最中に普請を始めたのであるから、人が立つて見る、いゝ鹽梅だと思つて盛にやる。そうするとそろそろ目塗を外した者が出た。こっちは目塗りを外せば御用金が出ると思ふた、これは一時の策であるが、先づ人情とはかういつたものである。

(實話) (『子爵由利公正伝』二三〇頁)

右の話は端なくも、會計事務局判事となつた鉄心と公正の經濟政策の相違と、ひいてはやがて二人が袂を分つことになる遠因を語るもの、と考える。維新の戦塵まだ収まりやらぬ時勢を憚つて、立派な家屋を建てる事を控えている鉄心は、民衆の上に立つ為政者は節儉に務めねばならぬという、儒教の為政者論を遵守している立場である。これに対して、萎縮している人心を解放させ、消費が活潑化しているように見せかける事によって景氣を振興させよう、という公正は、積極經濟の立場である。こうした二人の經濟思想の相違が、後日の衝突につながつてゆくのであるが、今はそれを語る時ではない。なお、この三月頃に作られたと考えられる「偶言二首」は、經濟政策について意見が対立している事に基

いて作った詩と思われるが、こういった事情に基づいているのが判明しないと、適確な解釈が下せないで、今は言及しないでおく。

七十六 総裁局史官

一方、海鷗の方は、明治元年三月二日に、「徴士、総裁局史官」を仰せつけられている（『百官履歴』下巻、一六二）。この事に関しては、海鷗は二月二十四日に河地善四郎らに宛てて作った書簡で報告しており、それは『大垣ものがたり』第六号二十二、三頁に翻字され、またその書影が伊藤信編纂『郷土勤皇家遺芳帖』（昭和十六年五月、岐阜県立岐阜図書館・大垣市立図書館）七十九頁に掲げられている。

愈^{いよいよ}御機嫌克^{よく}御座候哉。目出度奉^へ存候。然バ廿三日、天朝より左の如ク被^レ仰付^一、

菱田文蔵

徴士総裁局史官被^ニ仰付^一候事

二月

右ニ付、壹ヶ月給金貳百両、壹年メ貳千四百両被^ニ下置^一候。民蔵より八千四百両、たんともらひ申候。是からハ御両家ヲ始め、皆々手下タ共、并ニ三吉様より長四・文治ニ至るまで、当年中ニハ皆返納可^レ仕候間、左様御承知可^レ被^レ下候。今日より若党・草履取ヲ連て登朝仕候。此段御吹聴迄、如^レ斯御座候。誠に多事中、一々不^ニ申上^一候。急々

和助一人呼寄せ申仕候間、御紙面等御遣し可_レ被_レ下候。乍_レ憚連中一同、婦人ニ至る迄、御吹聴可_レ被_レ下候。此地ニて二兵衛様も甚御よろこび下され候。もう日々(鯛)の吸物に、よるハ三味線ニてくらし候ても、式、三年二千両持て退職出来可_レ申候。御一笑可_レ被_レ下候。しかし今日ニも御役御免ナレバ、あかん事ニ候得共、赤心報国に相勤申候。左の人々へ

伊藤民之助様

同 有無様

久世清助様

沢 彦助様

荒惣

吉亀

皆々へよろしく御一声可_レ被_レ下候。

かしく

廿四日夕

善四様

酔花様

これに抛れば、実際の出仕は、『百官履歴』に載せられているよりも早く、二月二十四日の事であった。高給と好遇を得て喜んでいる様が述べられているのであるが、それも、右書簡中に通称「二兵衛」が出てくる鉄心の推薦に基くも

のであろう。そして、その高給から河地善四郎や酔花たちに借金を返済する事が述べられているが、この兩人はまた「婦人」をかかえてもいるようであるから、たぶん料亭の主人なのではないか、と思う。

このようにして海鷗は、明治元年の二、三月の交には上機嫌であったが、詩もそれに応じて明るい。たとえば、「戊辰春日、京都小寓の作」は、第六句に「官軍」の文字が見えるから、二月二十四日以降の作品であろう、と考えられるが、次のようなものである。

諸老日来往　　諸老　日に来往し

話奇杯案間　　奇を語る　杯案の間に

嫩鷺春水岸　　嫩鷺　春水の岸

高柳夕陽湾　　高柳　夕陽の湾

市近元非隠　　市近くして　元より隠に非ず

官卑却喜閑　　官卑くして　却って閑を喜ぶ

胸襟正清迢　　胸襟　正に清迢ゆづ

況復对青山　　況んや復た　青山に対するをや

老人たちが毎日出入りしては

珍しい話を酒を飲みながら語る。

春の鴨河畔には若い鷺鳥が群れ、

夕陽が射す入江には、柳が高く植わっている。

市に近い所に住んでいるが、元来市隠ではなく、

官位は低いけれど、かえって暇なのが喜ばしい。

今ぞ胸中は、すがすがしく、ゆったりとしており、

まして緑萌える東山に向いあっていると、なおさらそうだ。

首聯は、ようやく平安が訪れた京都では、維新の功臣が新政府の政策をめぐって議論したり、戦乱時の体験を回想したりしている様を詠じているのだろう。海鷗は、日々、鴨川や東山を眺めて快適に暮していると見えるが、その事は、「東山に紫翠舒ぶ」（鴨涯矚目）、「無限なり東山の勝、朝朝我が眉を展ぶ」（水亭漫興）などという句がこの頃の詩に見出される事によっても確認できるのである。

ただし鴨川一帯は、名だたる紅灯の巷である。遊蕩児としての側面を有している海鷗が、この鴨川近辺に暮しているとおっては、しかも資金も潤沢とおっては、客寓に閉じ込めてばかりはいられない。休日には紅灯の巷に出遊という次第になるのである。「鴨東竹枝」は、そのような側面を表した作である。

五日参朝一日閑 五日は朝に参じ 一日は閑なり

蓬頭粗服跨洋鞍 蓬頭 粗服 洋鞍に跨る

春風不使英雄老 春風 英雄をして老いしめず

花満鴨東十二欄 花は満つ 鴨東の十二欄に

五日間、朝廷に勤仕すると、一日は休みになる。

髪も整えず、粗末な私服で、西洋風の鞍にまたがって出かける。

春風に吹かれると、私の内の英雄の気がよみがえり、

鴨川の東の、花に沢山のおぼしまが囲まれている妓楼に登る。

この二・三月の交は、二月二十日、東山道の先鋒として出発した大垣藩の兵が、やがて武州（埼玉県）羽丹生に至り、三月九日、築田に屯集していた脱走兵と戦い、大いにこれを破り、進んで忍城に逼る頃なのであるが、そうした情報がまだ海鷗の耳には届いていなかったのであらう、「旧を恋ふ」という詩に藩兵の運命を心配している。

恋旧傲狐首 旧を恋ふこと 狐首に傲ひ

臨急思豹皮 危きに臨み 豹皮を思ふ

洛南鞞鼓罷 洛南 鞞鼓罷み

関左羽書馳 関左 羽書馳す

身寄刀三尺 身は寄す 刀三尺に

官扶筆一枝 官は扶えらる 筆一枝に

関心征戦士 心に関す 征戦の士

奏捷定何時 捷を奏するは、定めて何れの時ぞ

狐が死んでも自分の住んでいた丘の方に首を向けるように、故郷の昔の事が懐しい。

官吏として危うい場合に遭うと、豹が皮を惜んで隠れるように、隠退したいと思う。

京坂では戦^{いくさ}さがやんだが、

関東の方では頻りに闘いが行われている。

この身は三尺の刀を頼みとし、

史官は一本の筆に支えられている。

気になるのは我が藩の出征した兵の事だ。

勝利の鬨^{なげ}の声をあげるのは、一体、いつなのであろう。

第六句には「余 時に史官に任ぜられる」、尾聯には「是の時、吾が藩、東山道の先鋒たり」という自注がある。右の詩には「戊辰春日、京都小寓作」におけるような、京都の官吏生活についての手放しな喜びは見られず、官吏という職務への警戒感や、それに応じてであろう、故郷の生活への回帰の思いなどが見られる。また、例の杜甫風の憂国の情も点出してあり、何か以前の幕末期における作品群に戻ったような詩風なのである。

七十七 鉄心と明治の元勳

戊辰の年、三月上旬、雪爪禪師が京都に来った。師は六月上旬まで在京するのである（『鴻雪爪翁』三九頁）が、この間、鉄心は師および明治の元勳と遊ぶ事が多かった。勿論、単なる遊びに止まらずに、その間に政治や時事を議論す

る事も多かったことは、後に述べる通りである。

その一は、鉄心がある日、三岡（由利公正）を鴨川東の寓居に訪れると、公正は不在であったが、園池は奥深く、梅花が盛んに咲いている。たまたま雪爪禪師がやって来たので、鉄心は禪師と飲み出した。杯は快調に重ねられ、鉄心はとうとう酔い潰れて、翌朝まで寝てしまった。明け方、園中を歩くと、鳥が鳴き出し、月は梅の枝に掛かって白く光り、梅の花との見分けがつかない。池の水が明るくなると、鉄心の足元には梅の枝の影が斜めに横たわっている、という事があった（「訪三岡徴士河東寓居」、園池幽邃、梅花盛開、時徴士不在、雪爪禪師偶至、対酌適甚、醉倒到明、起步園中）。その詩は、「橋辺試歩已啼鴉、月掛梅枝不辨花、一片曉光明在水、忽從脚下認橫斜」というもの（『遺稿』別録）である。

三月二十五日、雪爪禪師は、長楽寺の鐘声に夢を破られ、早起きして窓を開けると、東山の桜が明け方の雲の間にかすかに見える。急に嵐山の景勝を想い出し、少年を走らせて小原鉄心に同行を促す。まず嵐山の雪亭に至り、杯を傾けだすと、川を隔てた花が水に映って、手に取りたいほどに美しい。

隣室に客があり、木戸松菊（孝允）・広沢兵助（真臣、まねおみ号は障岳、長州藩士、内国事務局判事）・寺内暢三などである。松菊は、雪爪と鉄心が対酌しているのを覗いて、女中をして招かせる。鉄心は行ったが、雪爪は行こうとせぬ。鉄心は戻って来て、雪爪の手を引いて彼らの席につかせる。皆大喜びして、飲んだり話したりして、話題は国事に及ぶ。松菊は喜んでにこにことし、兵助は鐘のような大声を吐き、鉄心は腕をひろげて罰杯を飲ませ、暢三は警句に詼諧を交える。興趣はますます盛り上がり、夜半まで飲を尽し、一同は酔い潰れた。雪爪も水音を聴きながら眠りに就いた。（七絶あり）

翌日の明け方、起きて川に口すすいで宿酔を解き、残月の下に徘徊すると、皆もまた付いて来る。で、胡牀を岸辺に

置いて、朝酒を飲むと快適である。暫くして朝日が山を離れ、もやが次第に消えると、数百株の山桜が松や杉の間から踊り出て来る。一同は「素晴らしい」と叫び、杯を挙げる。やがて女中が風呂の用意ができた事を告げる。

雪爪と松菊が雪亭に戻ると、馬に騎って軒下にたたずんでいる人がおり、その容貌は、田舎者のようで、銃を持った兵が数名、その傍らに控えている。松菊は驚き視てから膝まづいた。雪爪が、

「あれは何者か」

と問うと、馬に騎った人が声に応じて、

「私を何者かと問う者こそ何者だ」

と言う。

松菊が名を告げたので、雪爪は始めてそれが佐賀の閑叟公（鍋島直正）である事を知った。そこで言葉をかける。

「公は天下の名侯です。それなのに猶も昔のままに銃隊をひきいて花を見ていらっしゃる。そんな調子では天下の事は大抵推しはかれます。その上、聞けば、公は国家が危機に瀕し、志士が尽力している日々に当って、漁夫が蚌シガイの争いを見ている態度に倣い、平然として手を懐に納めて、少しの兵をも京都に出さなかったそうです。たぶん考えるところあつての事でしょうか。今、国家の方針が定まっているのに、どうして早く方向転換して国政を助けなさらないのか」

公は、

「なるほど」

とおっしゃった。かくて、意気相投じて、談論湧くが如くになった。それで、諸公と舟を前の川に浮かべ、桜花が映っている間を上下した。

突如、誰かが笙を花の下で吹いている音が聞えてきた。その音は亮々と響いて、山も水も揺るごとくするほどだ。舟から降りて岸辺で再び飲み出すと、山階王（言繩）・五条卿（為栄）・大久保甲東（利通）・中根雪江の諸子も、やって来た。車座になって一緒に飲んでいると、閑叟公がほろ酔いの態で、「花は応に老人の頭に上るを羞づべし」の句を吟じ、鞍に跨り、鞭を鳴らして去っていかれた。松菊が雪爪の肩を打って言う。

「私が以前、閑叟に向かって言いたくとも言えなかった事を、禪師は初対面で言い尽した。単に私どものためばかりでなく、まことに国家にとっても幸いだ」

兵助も言った。

「肥前公の胸中の多くの権謀術数を、禪師は舌鎚で一撃なされた。何と痛快ではないか」

この遊は戊辰三月の事であり、この日、期せずして会する者は十余人、そして雪爪が閑叟公と交わるようになったのは、嵐峽の桜花が実に仲立をしたのである。（『山高水長図記』中「嵐峽曉花」）

この日が三月二十五日であった事は、次に引く鉄心の詩の題によって明らかにする。即ち、鉄心の「三月二十五日、雪爪禪師と共に嵐山に遊び、木戸・広沢・寺内の三士に花下に邂逅し、遂に共に雪亭に宿す」（『遺稿』別録）は、右の遊びを詠じたものであった。

糸竹人帰月未生

糸竹の人は帰りて 月未だ生ぜず

潺湲自覚耳辺清

潺湲として

自^{おのすか}ら覚ゆ 耳辺の清きを

従非ト夜為吟賞

夜をトして吟賞を為すに非ざるよりは

争識嵐溪有水声 争でか識らん 嵐溪に水声有るを

三味線を演奏していた女性たちは帰り、月はまだ昇って来ない。

さらさらという川音に、おのずと耳もとがすがすがしくなるのを感じる。

夜を徹して詩を作ったり、花を鑑賞したりする風流心が無ければ、

どうして大堰川の水声の美しさが分るうか。

雪爪の遊記にも「余も亦た水声を聴きて眠りに就く」とあり、その詩の承句にも「夜聴「溪声」眠「酒家」」とあって、大堰川の水音を聞きながら眠るという体験は、二人にとってよほど新鮮であったようだ。

翌二十六日の舟遊については、鉄心は、「翌二十六日、曉に起きて飲を溪流の上に設く、已にして山科王、五条卿、肥前老公、及び大久保・中根・土肥の三徴士等、相尋で至る、殆ど豪興を極む、字を分ちて遊を得たり」(『遺稿』別録)において、こう詠ずる。

花外溪流碧若油 花外の溪流 碧は油の若し

霞笙風慢貴人舟 霞笙 風は慢る 貴人の舟

地天泰運開今日 地天の泰運 今日に開く

俣与王公為醉遊 俣 王公と 醉遊を為す

桜花に対して流れる大堰川は紺碧で、油のように波立たぬ。

朝焼けに笙の音は冴え渡り、風は貴人が乗った舟をなぶるように吹く。

今日、天（陽・上）と地（陰・下）とが十分に交流しあうという運が開かれて、

朝廷の公卿と藩から召された徴士とが、ほしいままに酔って遊んでいられる。

『易経』においては、泰卦は、「天地交わって万物通ずるなり。上下交わって其の志し同じきなり」という意味を有するが、戊辰の年に至って泰運が実現して、上の公卿と下の徴士とが同舟して酔遊するという、江戸時代に比すれば民主化が進んだ現象が開かれたのである。明治の、画期的で、史的意義を有した新現象を喝破した物として、右の転結句は、甚だ貴重な表現である、と言えよう。なお、鉄心の詩題によって、更に土肥徴士が二十六日の遊に加っており、この土肥徴士が笙を吹いた人であるらしい事が窺い知られるのである。土肥氏で徴士である者を、『百官履歴』に徴すると、岡山藩の土肥典膳と鳥取藩の土肥実匡（謙蔵）とが挙げられるのであるが、いずれの土肥氏であるのか、俄かには判明しない。

鉄心が木戸孝允と親しく交っている事は、既に見た通りであるが、『木戸孝允日記』（日本史籍協会叢書74）に拠れば、戊辰の年の四月十日まで、鉄心および海鷗たちと孝允とは、頻繁に往来している。次にそれらの記事を抜き出してみよう。

四月二日 肥前公（鍋島閑叟）招によって官代（役所の意か）より其邸に至る。越春岳公・秋月種樹公、席に在り。

近江の僧雪爪・大垣人小原鉄心・越前人中根雪江・同大夫境某（酒井十之丞か）・画工愛山（ママ鶴か）等倍す（陪）。

杯盤狼籍ママ、書画甚盛なり。帰路、直に与_ニ鉄心・障岳_一、三樹月波楼に至り一宿す。

三樹とは、三本木であり、頼山陽の山紫水明荘があつた所であり、また雪爪が仮寓している老竜庵もある（『山高水長図記』中「三樹風煙」）。

四月四日 対州大島似水と月波楼に会す。雪爪・鉄心・海鷗も亦至る。共に雪爪の旅寓に至りて泊す。此日晚景、官代より帰る。

鉄心と海鷗は、この日、三本木の老竜庵に宿泊したのである。対馬藩の大島似水は、通称友之允_{ともよし}、長州と親しかった人である。

四月五日 参官。午後、訪_ニ葉山堂_一、夜、鉄心・海鷗に会す。談、総て十年來の時勢に涉る。

四月六日 （前略）又訪_ニ鉄心_一。家にあらず。

四月八日 参官。夕、清輝楼に似水・雪爪・鉄心・海鷗等と相会す。快飲、夜半に至る。

四月九日 （前略）予、下坂の命あり。此夜、柏亭に別飲之約をなす。薄暮、会するもの、土州福岡藤次、高山左太衛・長岡健吉、阿州中島栄吉、讃州（日柳）燕石、大垣鉄石ママ・海鷗・竹洲也。雪爪禪師も亦来。留別の詩を揮。又、過日嵐山行之巻を写し、各書画、任意揮。明後日、秋月侯の旅官ママに招きあり。禪師伝_レ之。

孝允は大坂の行在所に在らせられる明治天皇のもとで制度一変や還幸の議を決するために下坂するのであるが、その送別の席において鉄心たちは詩を作った。その詩が「干令木戸君、命を奉じて急に鎮西に赴く、別に臨んで賦して贈る」（『遺稿』別録）であろう。

昨来一雨雖然快 昨来一雨 然く快しと雖も

尚是霽陰分半天 尚ほ是れ 霽陰 分半の天

片語餞君君注意 片語 君に餞す 君注意せよ

今時所尚即雲烟 今時 尚ぶ所は 即ち雲烟

昨日からの雨は、晴れたとはいふものの、

まだなお半ばは晴れ半ばは曇っているという空模様。

一言、貴殿に餞^{はなむけ}いたしますから、よくお聞き下さい。

当代に貴ばれるものは、ほかならぬ自然美に没入することです。

起承の二句は、昨日からの天候に託して、今時の情勢——新政府が活動し始めたが、なお幕府側が抵抗している——を比喩したものであろう。そうとすれば、片語の餞とは、山水自然の美に逍遙することによって、いたずらに戦争に奔ろうとする事はない態度、即ち幕府側を追いつめない態度を勧告しているのであらう。右詩に対する小野湖山の批評は、「語は浅くして意は深し。唯だ君のみ能く之を言ひ、唯だ木戸君のみ能く之を了するのみ」というものだが、その深意とは右のようなものではなからうか。なお、題の「干令」とは、孝允の号である。

四月十日 十字（時）参官。関東より土州の報知あり、高山より示す。（徳川）慶喜、伏罪奉命の件なり。五字過より秋月侯の旅館に至る。会するもの、閑叟・春岳二侯、越の中根・青山・毛受と、鉄心・雪爪・（谷口）靄山・柳東（日柳燕石）、及び障岳と予也。書画詩酒、興酣なり。（中略）四更、馬を馳せて家に帰る。途中、微雨に逢ふ。

右に抛れば、四月十日には、鉄心は秋月種樹侯、および中根雪江・青山貞（小三郎）・毛受洪（めんじゅうひろし）と一緒にしているのであるが、それで思い合わされる事がある。即ち『鉄心遺稿』別録では前引した木戸孝允送別詩の二首後、後引する四月十五日の詩の直前に、「退朝の帰路、中根・毛受・青山の三徴士と共に連騎して洛西の妙心寺に到る、途中の口占」と「秋月侯の招宴に、大酔し鞍に跨りて帰り、賦して乗る所の馬呉竹に似す」という詩が配されているのであるが、この二首は、配置の場所が適正なるものとすると、四月九日以後、四月十五日以前の作品だ、と考えられる。そして、十日には鉄心は右二首に出てくる四人と会っているのだから、右二首は四月十日の事を詠じ分けた作品だ、と考え得るのである。という事は、四月十日、秋月侯の旅館——それは妙心寺の塔頭であつたろうが——で催される宴に参加するために、鉄心と三徴士は、朝廷の仕事がひけると騎を連ねて妙心寺に到り、宴果てて後、鉄心は大酔して愛馬呉竹の背で昏睡しながら帰ったのであらう、という事になる。そのような推測のもとに右二首を掲げる。まず、「退朝帰路……」である。

落日放衙時出城 落日 放衙 時に城を出て

一鞭去叩老僧扃 一鞭 去りて叩く 老僧の扃

朝来坐閱簿書眼 朝来 坐ろに簿書を閲するの眼を

移見青山別様青 移して青山を見れば 別様に青し

日が落ちる頃、役所をひいて城外に出、

馬に鞭を当てて、老僧の住む寺の門を訪れる。

朝から漫然と帳簿を調べていた眼を、

移して青い山を眺めると、また一段と青さが鮮やかだ。

次に「秋月候……」である。

夜跨吟鞍得得還 夜 吟鞍に跨りて 得々と還る

先生依倒睡昏昏 先生 依倒して 睡りて昏昏

可憐吳竹熟帰路 憐むべし 吳竹 帰路に熟し

駄得醉人来到門 醉人を駄し得て 来りて門に到る

夜、吟詠しながら鞍に跨り、てくてくと帰る。

先生は酔いつぶれて、昏々と眠っている。

可愛い事には吳竹は、帰り道をよく知っていて、

この酔っぱらいをかついで、門までたどりついた。

この滑稽な詩によって鉄心の愛馬の名が吳竹であると判明するのであるが、右の二首は詩題に乗馬が出てくる点でも共通しており、その事も、同日の作品であろうという推測を補強するのである。

孝允は、これ以後、大坂・山口・長崎と移動するので、鉄心・海鷗との交際は暫時断える。

『遺稿』別録の配置に従うと、四月十日以前の事であるかも知れないが、この頃に鉄心は、長州の重臣六戸敬宇（名は璣、四十歳）と対酌する事があった（「長州の老臣敬宇六戸君に寄す並びに引」〔『遺稿』別録〕）。敬宇は当初、明倫館祭酒山県太華の養子となり、山県半蔵と称していたが、十四年前の安政元年（一八五四）三月から十月まで、幕府の勘定吟味役村垣範正のりまさに従って蝦夷を探索し、翌二年、帰国の際に大垣に立ちより、江馬細香を湘夢書屋に訪れて鉄心らと会飲した事があった。鉄心は引に、「君初め山縣半蔵と称す、嘗て東遊して蝦夷に到り、帰途に吾が大垣を過りて細香江馬氏を訪ひ、其の湘夢書屋に会飲す。今を距ること已に十二年なりき矣」と書いているが、十二年は十四年の誤りではなからうか。安政二年の頃に山県半蔵が細香を訪れた、という記事は『湘夢遺稿』にも、伊藤信著『細香と紅蘭』にも見えず、鉄心のこの詩の引によって始めて知られる事柄である。詩は次の如くである。

吾は人間第一流

吾は是れ 人間の第一流

放朝日酔鴨崖楼

放朝 日に酔ふ 鴨崖の楼に

記歴湘夢書房飲

記するや 湘夢書房の飲

説及北辺唐太洲

北辺の唐太洲からんどうに説及するを

私はこの世で第一流の人物だ。

朝廷の勤仕が終ると、毎日、鴨川べりの酒楼で酔っている。

貴君は憶えていますか、かつて細香殿の湘夢書房で杯を共にして、

北のはてのカラフトの事情を語られていた事を。

起句は、鉄心詩には稀有な、手放しの壮語である。しかし、第二句が、杜甫が左拾遺ではあるが重用されず、くさっていた時期（乾元元年へ七五八年）春に作った「曲江」第二首の「朝より回って日々春衣を典し、毎日江頭に酔を尽して帰る」を踏まえた表現である事を考慮すると、自分は第一流の人物であるのに杜甫と同様に朝廷に重用されない、という憤懣があつて、その反動として、このように壮語している、とも考えられるのである。だから、この頃の鉄心の頻繁な出遊には、太政官札をめぐつての三岡公正一派に対する憤懣（第八十三節参照）を解消したい、という懐^{しほ}いが伏在していたのであろう。それと、「于役三年家に在らず」（「出遊」『遺稿』別録）という寂しさもあつて、「且く紅袖を携へて烟霞に酔はん」（同）という機会が多かつたのであろう。

七十八 官軍の勝利

四月十五日、鉄心が雪爪を誘つて宇治に遊びに出かけたところ、藤森を過ぎて、小倉堤に到ると、大久保利通・広沢兵助・神山郡廉（君風、佐多衛、高知県土族、文政十二年正月生。『百官履歴』上、二二六頁）の三徴士が追い来り、ともに宇治の万碧楼に投宿した遊びは、『山高水長図記』中「万碧水声」に尽され、『小原鉄心伝』二四一頁にも同書に拠つて詳述されているから、これ以上は述べない。ただ、翌十六日には舟を宇治川に浮べて、衆人が時事を談論し、雪爪が「国家安危の感、此の一葉の舟中に集まる」という名句を吐いた、と言うが、四月十一日に官軍が江戸に入城したという情報については何の言及も無いから、一同はまだこの事を知っていないのかも知れない。鉄心の「四月望、大久保・広沢・神山の三徴士及び雪爪禪師と共に菟道の万碧楼に宿す」（『遺稿』別録）にも、

仰対月明思遠征 仰ぎて月明に對し 遠征を思ふ

風塵関左若為情 風塵 関左 若為いかんの情

誰図今夜江楼宿 誰か図らん 今夜 江楼の宿

与此人豪聴水声 此の人豪と 水声を聴かんとは

明月を仰ぎ見て、遠く賊軍を討ちに行つた藩兵の事を思いやる。

関東における戦闘はどうなっているか、と心配だ。

思いきや、今夜、川辺の高殿で、

このような傑物たちと川音を聞こうとは。

と、官軍の江戸入城について聞いていないらしい様が詠ぜられている。ただし、大坂の行在所にいた木戸孝允はさすがにいち早く、四月十二日に、東征大総督有栖川熾仁親王の報知によって、先鋒の両総督が四日に入城した、という情報を得ている(『日記』)。

四月十七日に到ると、松平春岳が鉄心に次のような書簡と詩を寄せているので、鉄心たちにも江戸入城の知らせは届いていた事であろう。

今般、旧藩侯、蒙^ニ寛典^一。依^レ之、鉄心回天之尽力と、隣国の好み、感服、且窃に欣然候。鉄心心中満足思ひやられ申候ゆゑ、例之蕪什一章、似^{しめし}ニ鉄心^ニ候也。

慶応四年戊辰四月十七日 揖峯楼逸人書

鉄心雅伯

この「寛典」とは、大垣藩が甲州勝沼駅、武州羽生村において幕府軍を撃退し、三月九日に築田駅で脱走兵を破った功績により、四月十五日、大垣藩侯は鳥羽・伏見役の際に官軍に対抗した罪を宥免され、隊長以上の者も死罪一等を減じて永禁錮を申しつけられ、他は皆、刑法に処するに及ばず、という処遇を得た事をいう（『小原鉄心伝』二五四頁）。右の隊長とは、『復古記』六十一・明治元年四月十五日に拠れば、鉄心の養子小原兵部である事が知られる。そして、これには藩論を勤皇論へ変更させた鉄心の尽力が大きく寄与した、と春岳は言っているのである。

春岳が同時に鉄心に与えた詩は、次のようなものである。

一陣薫風宿霧収 一陣の薫風に 宿霧収まる

濃山新緑入看宜 濃山の新緑 看に入りて宜し

不妨平昔騰騰醉 妨げず 平昔 騰々として酔ふを

隻手回天正此時 隻手 天を回らすは 正に此の時

ひとしきり爽かな風が吹いて、たちこめていた霧が払われ、

美濃の山の新緑が眼に入ってきて美しい。

君が普断、ぐでんぐでんに酔っていても構わない。

独り尽力して藩論を勤皇論に換えたのは、そのような時だったのだから。

このように大垣藩に寛典が与えられ、春岳が慶祝の詩を贈っているのは、官軍が江戸に入城したのを新政府が確認しての事であろうから、四月十七日頃には鉄心たちにもその報が入ってきた事であろう、と考えている。

鉄心が春岳の贈詩に次韻して、「宰相越前老公、二絶句を賦して賜はる、乃ち其の韻に次して以って奉呈す」(『遺稿』別録)二首を作ったのは、それから間もない時の事であろう。その第一首の自注に、「吾が大垣兵、命を奉じて(関)東州に在り、連戦功を奏す、朝廷特に褒章を賜ふ」と言うのは、この頃に江戸入城を聞いていた証としてよいであろう。そして第一首では、「九重の聖旨」が「振起す三軍敢死の心を」と、更に東北に征討するであろう藩兵が寛典によって一層の闘志を奮い起すであろう、と詠ずる。

第二首は、次のようなものである。

誰か優命有今日	誰か図らん	優命	今日有らんとは
四海正逢王化宜	四海	正に逢ふ	王化の宜きに
往事回頭肝胆冷	往事	頭を回らせば	肝胆冷ゆ
洛南炎焰漲天時	洛南の炎焰	天に漲る時	

いったい誰が予測しただろう、今日、朝廷が寛典を賜わるなどと。

天下は今やまさしく天皇が宜しく治めたまう時となった。

過ぎ去った事を回想してみると、肝が冷える思いがする。

あの鳥羽の戦火が天にみなぎった時の事を。

この詩の「宜」「時」という韻は、春岳詩のそれと同一であるから、次韻した詩である事は明らかである。だとすると、承句はやはり官軍の江戸入城を言ったものであろうから、四月十七日にはこの情報鉄心の耳に届いていたのであろう。なお、鉄心自注に「吾が大垣兵、嘗て官軍と鳥羽に戦ふ、今討賊功有るを以て、前罪を免る、故に云ふ」とあり、息子の兵部が鳥羽戦争に参加していた事に如何に鉄心が懊悩したかが、あらためて窺い知られるのである。

こうして四月十七日頃に江戸入城の知らせが入ったとすると、海鷗の「夏夕、涼棚に酒を置く、東征の捷報至る、喜んで賦す」は、それ以降、後述するような理由により閏四月上旬に作られたものであろう。

佳客不招至 佳客 招かずして至る

涼棚坐水声 涼棚 水声に坐す

残雷遥岫暗 残雷 遥岫暗く

初月半江晴 初月 半江晴る

展紙妓磨墨 紙を展じて 妓は墨を磨し

把杯酒話兵 杯を把りて 僧は兵を話す

飛書時報勝 飛書 時に勝を報ず

痛快酒頻傾 痛快 酒頻りに傾く

好ましい客が招かなくても訪れてきた。

涼み棚に川音を聞きながら坐る事にしよう。

向うの山あいには暗く雲に掩われ、雷がまだ鳴っているが、

川のこちら側は晴れて、月が姿を見せる。

妓女は紙をひろげて墨をすり、

僧は杯を手にして軍の話をする。

時に急な知らせが届けられて、官軍の勝利を告げ、

喜びの余り、酒杯を頻繁に傾ける。

第六句の「僧」とは、雪爪であろうか。はたまた後述するように木蘇大夢であろうか。

七十九 依田学海の入京

佐倉藩の江戸邸留守居役である依田学海は、この戊辰の年には藩命を帯びて二月三十日に京都に入り、十月五日に江戸に向けて出発するまで八ヶ月余り滞在していた。その間に鉄心や海鷗などに会う事もあり、『学海日録』にはそうした消息が記されている事がある。以下にそれを抜き出してみよう。

四月廿二日。(中略) 是夜、大垣ノ鳥居断三・小ノ崎小右衛門にあふ。皆、貢士なり。菅竹洲に面す。また一名士。四月廿四日。(中略) 大垣の柴崎氏・菅氏をとふ。……菅竹洲、亦奇録三巻ををくらる。

学海は『海鷗遺稿』や『山高水長図記』に評語を与えているが、そのような大垣藩に関係する文人との交友は、実に

この四月二十二日の菅竹洲との対面を契機としたのである。貢士とは、諸藩から選ばれて貢士対策所に出仕した者。柴崎氏とは、『復古記』六十一・明治元年四月十五日に見える柴崎秀左衛門であろう。

四月廿六日。（前略）大垣の鳥井氏をとひしに、これも在らず。午後、例の井梅（祇園の井梅楼）に至り、……鳥

居氏はかならずこのあたりに居るべしと思ひたれば人をやりしに、柳楼にあるとききて、その家にゆきて一面す。

大夫何某・史官菱田何某も坐にありき。

大夫何某とは、鉄心の事であろう。海鷗もその座に在ったのであろうが、右の書きぶりによれば、学海はこの時まで鉄心と海鷗の事をよくは知らなかったようであり、この時が三者の初対面であつたろう、と考えられるのである。第一節に述べたように、学海は早くから大垣藩士某の武勇談を聞いていたのであるが、その某とは眼の前にいる菱田某である事などを、この時に知って、あらためて感動したのではなからうか。ちなみに海鷗の武勇談については、学海は、「是れ海鷗先生の一生の快事、宜しく大書特筆すべし」（岐阜県警部長久保誠之君に贈る）『海鷗遺稿』の頭評）と賞賛を惜まない。

閏四月朔日。晴。大垣小原氏をとふ。あらず。

同十四日。晴。大垣ノ小原二兵衛をとふ。偶、津藩藤井鼎助来りて話す。藤井云、国府台・市川辺にも屯集の兵あり。総督の命ヲ以て藤堂準人、一大隊ヲ率、四月廿六日、川を渡りしとき、敵不意に起て我を舟中に蹙す。我兵奮戦して之を走らしむといふ。

学海が日を追って鉄心に近づいてゆく様が窺える。また、鉄心たちが他藩の人間と交際する中で、戊辰戦争の情報を得てゆく有様が右の記事によって知られるのである。

八十 明治天皇還幸

閏四月から五月にかけて戊辰戦争が関東から東北地方に移っている事は、前節の記事からも窺えるのであるが、大垣藩兵も岩井駅・宇都宮・白河・会津へと兵を進めた。鉄心と親しかった高岡西藩(五十二歳。字は哲夫、通称は三郎兵衛)は、御年寄として征討軍に参加し、藩の武名をとどろかすのに功績があった。そこで鉄心は、「高岡哲夫の軍に奥州に在るに寄懷す」(『遺稿』別録)を西溝に寄せている。この詩は閏四月上旬の作であろう。

君在東陬吾帝京 君は東陬に在り 吾は帝京

関山不隔各天情 関山 隔てず 各天の情を

遠征一段悄然処 遠征 一段と 悄然たる処

月白胡笳徹夜声 月は白し 胡笳 徹夜の声に

貴殿は東奥におられ、私は京都にいる。

だが、関所のある山々は、それぞれの地にある我々の友情を妨げはしない。

遠く征討の地に在って、ひとしお寂しさに沈んでおられると、

輝く月光のもと、敵兵の吹く笛の音が夜通し聞える事でありましょう。

『唐詩選』に多い辺塞詩に、これまた多用される「胡笳」を点出する技法などに拠って、遠く異郷に出征している西溝を慰めようとした詩である。

同じ頃、鉄心はまた木蘇大夢と一緒に鴨川西の酒樓に飲む事があった（『同ニ木蘇大夢ニ飲ニ鴨西酒樓ニ』『遺稿』別録）。大夢は、勤皇論者であり、明治元年一月、徴に応じて上京した、と言う（『新修大垣市史』通史編一、七九五頁）。また、『在臆話記』三・三には、

往年、越中小杉ノ松永氏ニ在ル時、主人ノ話ニ、半僧大夢は我家に寓シテ業ヲ生徒ニ授ケ、維新、軍興ル、官軍ニ従ヒ、書記ト為ル。其善光寺ニ屯スル、落馬シテ絶ス。人ハ如来サマノ罰ト云フ。

と官軍の書記となった事が述べられている。そうすると、この時、官軍の勝利を報告するために京都に戻って来たのかも知れない。詩は次のようなものである。

鴨西小閣有余清 鴨西の小閣 余清有り

故就低欄坐水声 故らに低欄に就きて 水声に坐す

山月未昇輝已発 山月 未だ昇らざるに 輝已に発し

乱流幾道忽奇明 乱流 幾道か 忽ち奇明

鴨川の西に在る小さな酒樓は、甚だ清らかで、

我々はわざと低い手すりの、よく水音が聞ける所を選んで坐る。

山から昇る月の姿がまだ見えないのに、光の輝きがもう生じていて、

川の乱れた流れの幾筋かが、不意に素晴らしく明るくなった。

私がなぜ海鷗の「夏夕涼棚置酒」の「僧」を大夢の事かと推測し、大夢が戦勝報告のために入京したと推測するかと
いうと、海鷗詩と鉄心の右の詩とが同一の時と場所で作られたものかも知れぬ、と考えるからである。というのは、両
詩ともに、「坐水声」の句を使用し、下平十七庚韻を用い、月が初めて昇る頃と同様な水明かりの景を捉えているから
である。そして、もし両詩が同一の時と場所で作られたものであるとすると、両詩の題と内容とを統合すると、「僧で
官軍の書記たる大夢」が「東征の捷報」を告げた、即ち入京した事になるからである。果して然りとすれば、海鷗の詩
は閏四月の作であろう、という事になる。

これより前、明治天皇は、海軍を点検するために閏四月五日、浪華港に行幸し、大坂に滞在していたが、閏四月八日
午半刻、京都に還御した。鉄心は、その行列を建礼門外に出迎えた。(「車駕、浪華港に幸し、海軍を点検す、事畢りて
還幸す。蹕を建礼門外に迎へ、恭く二十八字を賦す」『遺稿』別録)。詩は次のようなものである。

正遇鑾輿巡狩回 正に遇ふ 鑾輿 巡狩して回るに

錦旗映日五雲開 錦旗 日に映じて 五雲開く

恩威遠及蛮荒外 恩威 遠く及ぶ 蛮荒の外に

知是有苗不日来 知んぬ是れ 有苗 日ならずして来るを

天子の御輿が地方を巡検して還幸せられるのに、まさしく出会った。

五色の雲が開けて、射し込む日に錦の御旗が映える。

その恩恵と威力は、遠く夷狄のはてまでも及んでおられるから、

有苗（古代、中国で南方にいた異民族）も近いうちに帰順してこよう。

翌閏四月九日、天皇は軍神を紫宸殿に祭り、三職・公卿・諸侯・徴士らが列席し、式終って宴を群臣に賜った（『復古記』卷七十二）。鉄心もこの宴に参加し、「禁中の賜宴、恭しく記す、五首」（『遺稿』別録）を詠している。鉄心の連作は、長松秋琴に言わせれば、「本邦、禁省（宮中）の諸作、古より見ること罕なり。大政新たに復し、君臣際会して、始めて此の作有り、以て聖代を頌するに足れり矣」という文学史的意義を有するものであるが、ここには第三・四・五首を挙げてみよう。

九重賜宴及微臣

九重の賜宴 微臣に及ぶ

手捧恩波激瀾新

手づから捧ぐ 恩波 激瀾れんえんとして新たなるを

咫尺天顔難拜得

咫尺の天顔 拜し得ること難し

偷従杯裡認竜鱗

偷かに杯裡より 竜鱗を認む

天子様の御宴に私ごとき臣下も招かれた。

なみなみとつがれたばかりの御酒を我が手にささげ持つ。

間近の御尊顔を拝見したてまつる事はでき難く、

杯の酒に映った御服をこっそりと見るばかりだ。

これはたぶん、天皇が御自身そそがれる酒を承けたてまつった事を詠じたものであろう。

雨滴瑤階暮色催

雨は瑤階に滴り 暮色催す

満堂銀燭夜筵開

満堂の銀燭 夜筵開かる

飲如鯨者拳三士

飲むこと鯨の如き者 三士を拳ぐ

更賜玻瓈船大盃

更に賜ふ 玻瓈 船大の盃を

雨は玉階をぬらし、夕暮れが迫る。

広間中に燭が明るく輝き、夜になっても宴が続けられる。

鯨のように飲む者が三名おるので、

さらに船型の大きなグラスが用意された。

転句に言う鯨飲三士は、広沢兵助・十時撰津および寛(鉄心)、と自注されている。広沢兵助は第七十七節に見えたが、十時撰津は柳河藩家老、維新後は大神雪斎と改称し、外国事務係であった(『百官履歴』上・二六七頁)。

寛度縦人酔且顛

寛度 人を縦^{ゆる}して 酔ひ且つ顛れしむ

未聞千古有斯筵 未だ聞かず 千古 斯の筵有るを

至尊同席渾亡却 至尊 同席 渾てを亡却す

唯覺祥雲遶座辺 唯だ覺ゆ 祥雲 座辺を遶るを

寛大な度量でもって臣下がつぶれるまで酔うのを許して下さる。

古来このような有難い宴があったとは聞いていない。

至尊が同席なさっている事をもすべて忘れてしまった。

ただ憶えているのは、めでたい雲が玉座あたりをめぐっていた事だけ。

以上のように通覧すると、当初は竜顔を仰ぐ事さえもできなかったほど緊張していた鉄心らが、酒が入るほどに平生の酔態に帰してゆき、はては無礼講となってしまう事が知られるのである。まさに明治天皇の寛大さが窺える資料ともなっている、と言えよう。

八十一 鍋島閑叟との交友

かつて中島棕隠が寓した鴨沂水荘は、頼山陽の修史の亭（山紫水明荘）と相隣っており、後に梁川星巖が住し、庭に怪松があるので老竜庵と名づけた所であるが、星巖の歿後は一、二、主人が入れ変って、今は谷口靄山の所有に帰している。そして、雪爪が入京してからは、靄山が雪爪を寓せしめている。閏四月十五日、薰風が緑の樹々を吹く真昼、雪

爪が几にもたれて眠っていると、呼び醒ます者があり、目をあけて見ると、鍋島閑叟公である。雪爪はゆっくり起つて溪流に口すすぎ、また坐つて公に挨拶すると、公は時候の挨拶もしないうちに国事について話し出す。雪爪は壁に掛けていた小瓢を取つて、公と酌みかわしていると、主客の別も無くなる。公が「洗尽す都城満面の塵を」という句を得ると、雪爪は、

翠色如流雨後山

翠色 流るるが如し 雨後の山

水声澆檻遠人間

水声 檻を澆りて 人間に遠し

客来饒舌知何意

客来りて 饒舌 知んぬ何の意ぞ

忙了湖翁半日閑

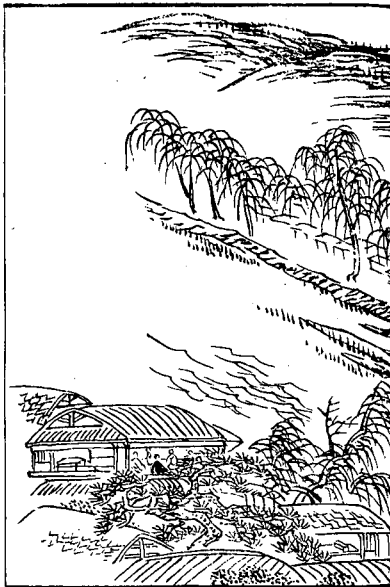
忙了す 湖翁 半日の閑を

雨上がりの山に青緑色が流れるように廻る。

水音が手摺りのあたりに響き、人里離れた赴きがある。

客がやって来て、おしゃべりするのとは、どういう積もりなのか。

湖畔に隠栖している私を半日忙しい思いにさせる。



『山高水長図記』中「鴨沂水莊」

という詩を示した。公は、

「詩は結構だが、饒舌の二字はあまりにひどいではないか」

と言う。

そこへ小原鉄心と長松秋琴（三十五歳。名は文中、字は子固、通称は幹。萩藩士、議政官試補）がやって来た。大酒家の鉄心は、瓢箪の酒が僅かであるのを見て、

「これだけの主人と客がいたら、座に大樽が無くてはならない」

と、急いで下僕を走らせて、酒を掛けて買わせ、秋琴としきりに大杯を傾け、談論湧くが如くである。公もまた大層喜んでおられる。

夜になって真っ暗になり、周辺はひっそりとし、灯火がぼんやりとともり、汀の柳にもやが立ち込めると、鉄心が、

風趣清真情亦真 風趣 清真 情も亦た真なり

と句を詠ずる。秋琴がこれに和して、

高軒時伴葛衣人 高軒 時に伴ふ 葛衣の人を

と言う。その時、鳥がカツカツと鳴き、水気を帯びた風がサア—と吹いて来た。欄外を見おろすと、月が溪流に映っている。雪爪が、

一欄流水半湾月 一欄 流水 半湾の月

という句を吐くと、公は先の「洗尽都城满面塵」で承け、ドツと哄笑された。まるで「虎溪の三笑」のようだ。更に飲んでから解散した。

この日の客と詩とは、すべて偶然に得たものである。そこで思う、以前、山陽は文をもって聞え、棕櫚と星巖は詩を

もって有名であり、その影響は今日まで伝わっておる。だが、僧と貴人や高官が懐いのたけをさっぱりと語りあえるという、今日の客人のような賓客は、どれほどいた事であろうか。『山高水長図記』中「鴨沂水荘」

服部空谷が言うように、この時、雪爪の小寓は、「廟堂諸公、及び諸有司（役人）の倶楽部」の観があった（『鴻雪爪翁』四〇頁）が、その様子が手に取るように窺い知られる文章である。また、長松秋琴は、自分が閑叟公の知を受けたのは、この時に始まる、と言う。

この日のことを鉄心が詠じた「雪爪禪師が三樹坡の小寓を訪ふ、肥前の閑叟老公及び長州の長松秋琴、先に在り、秋琴、詩有り、乃ち其の韻に次して以て老公に呈す」は次のようなものである。

老禪小住枕清河 老禪の小住 清河に枕む

誰料高人連騎過 誰か料らん 高人 騎を連ねて過るを

斜日將沈君且駐 斜日 將に沈まんとするも 君且く駐まれ

暮樓灯影惹涼多 暮樓 灯影 涼を惹くこと多ければ

雪爪禪師の小寓は、清らかな鴨川に臨んでおり、

思いがけなく高い風格の土が馬を並べて訪れて来る。

夕日が沈もうとしているが、老公、まずはお留り下さい。

夕暮れに灯がとった高殿は、ぐっと涼しくなりますから。

八十二 三本木の雅宴

戊辰閏四月十七日、明治天皇は、万事の政務を自身で処置しようという考えのもと、二条城を仮の皇居としようと考へ、その本丸に皇宮を、二の丸に太政官を新たに設けるという計画を定め、その御用掛りを鉄心に命じた。この事は、『復古記』七十四・明治元年閏四月十七日に、

参与内国事務判事小原忠寛ニ命シテ、仮皇居及ヒ太政官経営ノ事ヲ管セシム。

とあり、『百官履歴』百官一―二十一に、

同年閏四月十七日 御政マ筋万事御親裁ノ思召ニ付、二条城ヲ仮リノ皇居ト可_レ被_レ遊候。依_レ之、右本丸ニ皇居、

二丸ニ太政官新規御取建ノ筈、右御用掛被_ニ仰付_一候事。

とある。

この任命があつて後、その足で鉄心は雪爪禅師の寓居である、三本樹の老竜庵に赴いた。その事は『山高水長図記』中巻「三樹風煙」によつて明らかである。

三本樹の堤に、左右に広がっている亭があり、老竜庵と名づけられていた。鴨河と比叡山の名勝が欄から見わたされ、風景は大そう良い。高士や詩人が好んで遊ぶ所である。私がこの亭に仮寓すると、客人の履物が常に戸外に満ちるようになった。蓬頭の書生、突鬢の武士、縉紳公卿に論なく、訪問する者がいれば、これに会った。維新の初め、客たちは争つて時事を談じた。ある日、風はなごやかで気温が暖い日、一、二のお客と静かに語りたと思つてゐると、七、八人の客がやつて来た。いずれも朝廷から下つて来た者で、部屋いっぱいに坐った。座には一斗樽

のほかに豆腐だけを用意し、甚だ快適である。私は客たちに言った。

「あなた方は立派な方々で、身を宮中に置き、維新の大事業を計画されており、まことに天下の興望をになう方々です。ひるがえって私は、漂泊の一僧侶に過ぎない。あなた方が頻繁にいらっしゃるのはどういう訳なのか分りませぬ。が、退いて思いますに、およそ人が富貴・功名を愛することは、生よりも甚しきものがあります。だが、富貴も功名も、私とは関係が無い事は確かです。だから、そうした虚飾を放擲することは、私にはできません。」

『莊子』内篇大宗師に「魚ハ江湖ニ相忘ル」と言います。今日の遊びも、そういうものではありませんか」

この日、集った人は、大久保甲東・木戸松菊・広沢兵助・福岡孝悌・三岡公正・小原鉄心・横井小楠・寺内暢三・名和緩などであり、午後七時頃に散会した。明治紀元閏月十七日

福岡孝悌(弟とも。三十四歳)は、土佐藩士、三岡(由利)公正とともに五箇条の誓文の原案を起草した人で、時に徴士参与職。横井小楠(六十歳)は、閏四月に岩倉具視の懇望により、参与となったが、翌二年に暗殺される。寺内暢三(三十四歳)は萩藩士、十月に山口市尹となる。名和緩(三十一歳)は、萩藩吉敷の毛利出雲の陪臣で、高杉晋作の参謀に列し、この年に上京していた。「皆退食公ヨリスル者」だと言うから、鉄心たちが朝廷から下ったその足で、名士のクラブともいへき雪爪禅師の仮寓に向った事が分るのである。なお、六年前の文久二年六月に鉄心と海鷗が京都の諸名流七、八十名を東山の梅尾荘に招いて豪飲した事は、第三十二節に述べたが、その梅尾楼が今や老竜庵になっている事が、岡鹿門の評の、

鉄心、曾て京に遊び、蟄下の名士を此の楼に会す。頼支峰・(山中)静逸・(家里)松涛・(神山)鳳陽以下七、八十名、実に一世の豪拳たり。三十六峰、紫翠の映射する者、今猶ほ目に在り。……

という記述によって知られるのである。

八十三 辞官

戊辰の閏四月と五月の交、鉄心は、松平春岳の宴に招かれた。座には鍋島閑叟（五十五歳）と阿波侯蜂須賀茂韶（二十三歳）および雪爪禪師がいた。宴の後、人々は山水図を合作して楽しんだ。（越前老侯の招飲、肥・阿二侯に陪す。酔後に山水を合作す、雪爪禪師も亦た座に在り）。「肥阿二侯」を肥前・阿波の二侯と解したのは、『春岳遺稿』二の戊辰の部分を検すると、閏四月十六日の詩題に「閏月既望、肥前前中將・宇和島少將・阿波少將・長岡左京亮（細川護久）と共に、岩倉総裁の寓館に集まる。偶ま感ずる所有り、退きて一絶を賦す」とある如く、この頃、春岳は鍋島閑叟や蜂須賀茂韶らとしはしば会飲していたからである。鉄心の詩は、

政余墨戲也佳哉

政余の墨戲 也た佳なるかな

写水描山逸興催

水を写し 山を描き 逸興催す

因例老禪占上座

例に因り 老禪 上座を占め

林泉配合指揮来

林泉の配合 指揮し来る

朝政から退いた後に、水墨画で遊ぶのもまた結構だね。

川や山を描いていると、どんどん面白くなってくる。

いつもの通り、老禪師が上座に坐っていて、

林や泉の配合を指図なされる。

老禪は雪爪の事であるが、これについては鉄心の自注があつて、

肥前の閑叟公、一日、雪爪禪師に謂ひて曰く、余將に春岳公を招かんとす、師も亦た来り陪せよと。師曰く、否、余を以て上客と為さば、則ち行かん矣と。候咲つて諾す。後以て例と為す。毎会、師必ず来りて上座に在り。句中故に及ぶ。

という。世俗の身分など氣にも留めずに天真爛漫にふるまう雪爪の面目躍如たるものがある。また、閑叟・春嶽・茂韶・雪爪・鉄心たちが、この頃、頻繁に会していた事も知られるのである。

閏四月二十一日、官制が変更され、三職八局が廃せられ、議政・行政・神祇・會計・軍務・外国・刑法の七官が置かれる事となった。

翌二十二日、鉄心は、「是迄之職務被_レ免、會計官判事被_二仰付_一候事○同日 叙_二從五位下_一」(『百官履歷』一一二二)と、會計官判事となり、從五位以下に叙せられた。名称は多少変更される事はあつても、正月十七日以来、會計事務にあづかっている事は変らない。具体的にどのような仕事をしていたかと言うと、三岡八郎(由利公正)と組んで、京阪の富豪から國務基金として公債を募集し、賊軍を追討する官軍の軍費兵糧を手配し、貨幣改鑄を取調べ、金札の發行について検討していたのである。ただ、金札の發行については三岡と意見を異にし、

因循論は一步より千里を謬り候間、決然議論を立、金札の事件(案件)を非とし、議事三度に及び候得共、確乎として不_レ動。(五月七日、市川小蔵宛鉄心書簡)

と、三度にわたって激論している。その結果、一時的に三岡へ委任し、彼が失策すれば、鉄心の論を用いるという事に

だったので、「退職の内願書を差出し」たと述べ、更に、「何分三岡とは並び立不_レ申」と、三岡への嫌悪感さえ表明する。五月十六日小蔵宛書簡では、「とかく横井・三岡派一盃にはびこり、とんと論が喰違、今日の機会、面従の勸方にては国賊と存候間、毎々劇論いたし候」と横井小楠までをも敵に廻していることが述べられる。小楠は、安政五年から文久にかけて四回越前藩に招かれ、三岡と協力して殖産貿易事業を推進したりしたから、三岡と親しく、自然、三岡と共同戦線を張るのであろう。ともかく、三岡側の意見が通って、閏四月十九日、金札が発行され、列藩以下に貸与される事となった（『復古記』七十五）。既に見てきたように、鉄心は三岡とは親しく交わってきたし、小楠とも一緒に老竜亭で飲んだ仲である。そのような彼らと対立した事は、鉄心に嫌気を生じさせた事であらう。鉄心の辞職の意は、こうした政見の相違に胚胎する事は、小蔵宛書簡に見られる通りである。

かくて、嫌気がさし、自棄的になった鉄心は、年甲斐もなく酒亭でやけ酒を飲む事になる。「偶感三首」の第一首に、そうした様が詠ぜられる。

三吐心肝議不通

三たび心肝を吐けども 議通ぜず

醉眠且寄酒家中

醉眠 しば 且く寄す 酒家の中

高声唱出坡公句

高声に 唱へ出す 坡公の句

過眼青錢転手空

眼を過ぐれば、青錢 手を転じて空し

たびたび思いのありたけを吐露したが、意見は三岡たちに通じなかった。

ちょっとまあ酒楼に入って酔って眠るとしよう。

大声で蘇東坡の詩句を吟じてみる。

「懐に入ったばかりの給料は、あっという間になくなってしまふ」と。

蘇軾の句は、熙寧六年（一〇七三）、杭州在任中、公務で新城県へ出張した時の「山村五絶」第四首の承句である。

蘇詩では、「青錢」には王安石の新法による青苗錢を当てこすった含意がある由（査慎行『蘇詩補註』）だが、鉄心はこの句を、投げやりな気持から浪費に奔る意に転じたのであろう。

鉄心をして、朝官をやめて大垣へ帰ろうと思わしめた原因は、更にあった。即ち、大垣地方では、四月二十五日以来、霖雨があり、五月五日からは洪水が発生、八日の豪雨などで大被害が出来していたからである（『復古記』九十五上）。その事は鉄心も、「偶感三首」第二首注に「夏五月、霖雨、吾が大垣の封内に洪水の災有り、多藝郡最も酷し」と述べている。木曾川・長良川・揖斐川などが土砂を運んで形成した三角州に在る大垣は、昔から洪水が出やすかった事は、「小原鉄心の青年時代」第三節で既に述べた。二十六歳で藩老になったばかりの彼が早くも多藝郡の洪水の視察に出かけている事も、そこで述べた。が、二十六年後の今、また同じ地域で同じ災害が生じているのも、思えば不思議な因縁である。洪水の苦勞は、大垣藩に付いて廻るものなのだ。そうした懐いを鉄心は第二首に詠ずる。

欲忘不忘家国事 忘れんと欲して 忘れざるは 家国の事

付之一醉醉難成 之を一醉に付するも 醉成り難し

武人戦死固其分 武人 戦死するは 固り其の分

暴漲何堪漂我氓 暴漲 何ぞ堪えん 我が氓を漂はすを

忘れようとて忘れられぬは 家郷の大垣藩のこと。

この憂慮を酔いにまぎらかそうとしても、酔えはしない。

武士が戦死するのは、当然の務めで、別に構わぬが、

洪水が我が藩の民を漂わすのだけは、どうして耐えられようか。

このように宮仕えにやる気を失ない、郷国の洪水を憂慮する余り、鉄心は体調をくずして、五月上旬から中旬にかけて十日間ほど病床に臥していたが、その間に職を辞する決意を完全に固めたようである。なお、その病いとは、五月十六日小蔵宛書簡に「此せつは例年の淋毒発出、満身に吹出、大難儀ゐたし候」とあって、持病の淋病が暴れ出したのである。こうした事情を「偶感」第三首に次のように言う。

養病十日臥見河 養病 十日 見河に臥す

幾麦山雲掠眼過 幾たびか変ずる山雲 眼を掠めて過ぐ

忽把幽愁擲天外 忽ち幽愁を把りて 天外に擲てば

水声始入耳根多 水声 始めて耳根に入ること多し

病氣養生で十日間、鴨川河畔で寝ていた。

東山にかかる雲は、幾たびか形を変えては、あっという間に流れて行く。

ふと、もやもやした思いを天のかなたへ投げやったら、

鴨川の水音が始めて耳元に沢山聞えてきた。

転句の幽愁を天外に投げうつとは、宮仕えを放棄する決心を固めた事を言うのであろう。この決心がつくや否や、心が平靜になり、川音が耳に入るような余裕を得た事を、結句は言うのである。

折しも、五月十二日、鉄心は江戸府判事兼帯を仰せつけられた『百官履歴』一―二一〕のであるが、江戸へ出立するのを延引する願いを差しあげていた(後述の「辞職表」)。そして五月十五日、辞職表を岩倉具視議定兼輔相に差し上げ、添えるに「五月十五日、上_ニ辞職表於岩倉輔相公、副以_ニ此詩_一」詩をもつてした。

天日放光皇運開

天日 光を放ち 皇運開く

我郷独遇久霖災

我が郷のみ 独り遇ふ 久霖の災に

漂氓暴漲宵宵夢

氓を漂はす 暴漲 宵々の夢

沁骨殷憂為疾来

骨に沁むる殷憂 疾と為り来る

太陽が光を放つように帝の運は赫々として輝きわたるのに、

我が大垣藩だけは、長雨の災害が生じている。

民衆を漂わせる洪水の事を毎晩夢に見て、

骨にまでしみ入るような重い心配事のために病氣となってしまうたわい。

この辞表は、『鉄心伝』二四九頁や『復古記』九十一に掲載されている。なお、同じ十五日に辨官事へ提出した退職願いは、もっとあけすけで、「病症二十年来の淋病に御座候て、此節再発、別して相勝ぐれ申さず、越前宰相手医師岩佐玄珪に治療を受け罷在り候処、旧来の痼疾に付、急に全快には至り兼ね候段、申聞け候」（『書翰聚』一二七頁）と、淋病が二十年来の物である事を明かす。ちなみに岩佐玄珪は、明治天皇の侍医を務めた岩佐純の父親である。

鉄心は、十日間ほど屏居して、朝廷にのぼらなかつたが、胸中の鬱懷を酒によって洗い流していたらしい。そうしていると、五月十七日の御前会議の様子が松平春岳から伝えられて、明治天皇が鉄心の辞意を洩れ聞いて、惜みなされたという事が聞えて来て、鉄心は「微臣の進退、主上御親評などは実に冥加の至りに御座候」（五月廿日付小蔵宛書翰）と感激し、その事を、彼は「雨窓偶感」において、「屏居十日参朝せず、磊塊唯だ応に酒を把りて澆ぐべし、別に聖恩の藹然たる処有り、雨窓灯影寥々たらず」と詠じている。

五月二十二日、鉄心は再び辞表を書いて参与職の諸公に差し出し、ついに辞職を許されて、その喜びを次のように詠じた。「五月二十二日、再書辞表、与参与諸公、被_レ允、賦_レ此記_レ喜」。

雖然意氣尚粗豪 意氣は尚ほ粗豪なりと雖然_{いへど}も

自顧秋霜染髣毛 自ら顧るに 秋霜 髣毛を染む

昨日微臣参大政 昨日 微臣 大政に参ぜしが

拜恩回首斗牛高 拜恩 首を回らせば 斗牛のごと高し

自分の意気は、まだ盛んで強いのだが、

我が身を見やると、鬢髪は秋の霜のように白くなっている。

昨日まで朝政に微力ではあるが参加していたが、

振り返ってみると、帝より受けた御恩は北斗星や牽牛星のように高く仰がれる。

長松秋琴の評に、「依々として闕を恋ふ、臣子の至情なり」と言うが、確かに朝政にあずかる事にまだ未練を残している按配である。この時の再度の辞表も『鉄心伝』二五〇・一頁に掲載されているが、自分の後継者として同じ藩中の井田五蔵を推薦している。井田五蔵は藩儒井田澹泊の子で、名は讓、号は雷堂、鉄心の推薦が入れたと見えて、六月に新政府に仕えて軍務官権判事となり、翌二年正月には会計官権判事に転じ、後に陸軍少将・陸軍大学校長などに任じられている。安政六年に拙庵陳星瑞の『集古偶録』を私塾から死不休斎蔵板として刊行もしている。

五月二十五日、朝廷は鉄心を罷免する。だが、五月二十九日小蔵宛書翰には「雪爪・海鷗などの異論に困入り候」とあるように、雪爪・海鷗は、鉄心の辞職になお反対していたのである。

五月晦日（三十日）、朝廷は、特命を下して金あぶら鍮一双を賜い、左のような褒詞を添えた。

兼て勤王の志厚く、旧臘、兵馬紛擾の砌、無二念王事に勉勵し、殊に早春已来、旧藩反正、大藩に不レ劣、処々に於て勵戦致し候儀、汝の功居多、忝感不レ浅候。然る処、今度所勞の趣に付、不レ得已願之通、官爵被レ免、帰邑、御暇被レ仰付候間、全快次第可レ致上京旨、御沙汰に候事。

但勤勞の賞として賜二此品一候事。

御鍮 一具

（『百官履歴』・『復古記』九十一・六五四頁）

これに拠れば、朝廷はやはり、鉄心が佐幕派であった大垣藩の藩論を勤皇に反転させ、かくて藩が戊辰戦争において

は官軍として賊軍を攻撃する、というように仕向けた事を功績の第一としているのである。しかも朝廷は更に、鉄心が病氣回復後に朝政に戻る余地まで与えているのである。このような優遇に感激して、鉄心は「朝廷更に特命を下し、臣寛に賜ふに金鍔一双を以てす。感泣の余、恭しく二十八字を書す」（『遺稿』別録）を詠じた。

天賜一双金鍔鍔

天は賜う 一双の金鍔鍔

恩光長照子孫栄

恩光 長く照らす 子孫の栄

用之兵馬非吾願

之を兵馬に用ふるは 吾が願に非ず

緩輿尋花答太平

緩輿もて 花を尋ね 太平に答へん

帝が賜った一足の金の鍔、

その恩寵を表す光は永遠に子孫の光榮として輝こう。

私の願いは、これを軍馬に用いるのではなく、

ゆっくりとした輿で梅花を尋ねて、太平をもたらし賜うた御恩に答える、という事だ。

戦乱に倦んだ民心を代表して語った作、と言えよう。だが現実には、五月十六日、越後に在る大垣藩兵に東山道先鋒に応援する命令が下されており（『復古記』八十六）、戊辰戦争はまだ終っていないのである。

ただちに京を去ろうとして、鉄心は在京の同僚諸公に詩を贈った（「将に京を発せんとす、此を賦して在朝の諸同友に贈る」）。

敢忘天恩高九霄 敢て忘れんや 天恩 九霄より高きを

樽材只合趁漁樵 樽材 只だ合に 漁樵を趁ふべし

已期功業婦公等 已に期す 功業 公等に帰すを

我在山林如在朝 我は山林に在ること 朝に在るが如けん

皇恩が九重の天よりも高い事を、いかでか忘れられようや。

樽のように役立たず(『莊子』逍遙遊)な私は、もっぱら漁師や樵夫と一緒にいるべきだ。

維新の功績が諸君に帰する事を期待するからには、

私は山野を朝廷のように思っている事でしょう。

承句の「漁樵」は、『遺稿』別録の冒頭に置かれる「慶応三年丁卯の冬、輦下に在りて偶ま此の詩を作る」、

共仰政權帰帝朝 共に仰ぐ 政權 帝朝に帰するを

遺賢拔擢及漁樵 遺賢の拔擢 漁樵に及ぶ

若将世態比花候 若し世態を将って 花候に比すれば

是此春風第一朝 是は此れ 春風の第一朝

の「漁樵」と照応する、と小野湖山は言う。そして更に、「君の平生の処事と作詩とは、皆卒然として思を経ざる者の

如し。而るに其の精密、往々此に類す。亦た驚くべし」とも言う。鉄心は事を処理する上にも、作詩の場合にも無難作で熟慮しないように見えるが、その実、非常に精密に熟慮している。そうした精密さが、ほぼ六ヶ月を隔てて作った兩詩の照応に看取できる、と言うのである。鉄心の平生と詩とを知悉している湖山の評言であるから、信頼できるものであろう。豪放のようで細心、無難作の如くで精密、これは鉄心の人となりを端的に尽したものであろう。

鉄心の帰国を送って、松平春岳は、「小原是水の官を解かれて濃州に帰るを送る」（『春岳遺稿』二）を贈った。それは『鉄心伝』二五三頁に引かれるが、三箇所誤植があるようなので、改めて引いておこう。

蹴踏元来波是水

蹴踏 元来 是の水に波あり

人間万事尽帰空

人間 万事 尽く空に帰す

江湖廊廟安其遇

江湖 廊廟 其の遇ふに安んず

得失須観塞上翁

得失 須らく塞上翁に観るべし

元来、水というものには波がたち、それを渡って行くものだ。

この世の中的一切合切は、すべて空に帰するのだ。

野に在ろうが、朝廷に在ろうが、その待遇に安んじていて、

あの塞上の翁を見ならって、栄枯盛衰は糾える縄の如しと思っていればよいのだ。

起句はやや難解だが、鉄心の別号である「是水」を用いている所が味噌であらう。承句以下は、鉄心の名利に恬淡と

した所や、氣に入らない事をあっさりと投げ出す潔癖性を意識した上で作っているように私には感ぜられる。

八十四 帰 藩

治水に関わるとは帰藩のための口実で、六月初めに大垣に帰った鉄心は、無何有荘で悠々と病いを養っていたようである。「病を城北の無何有荘に養ふ」（『遺稿』別録）は、戊辰六月頃の作であろうが、次のように言う。

幾歳風塵滞帝都 幾歳か 風塵 帝都に滞る

帰来養病北荘廬 帰り来りて 病を養う 北荘の廬

清陰夏浅碧梧下 清陰 夏は浅し 碧梧の下

一榻茶烟読道書 一榻の茶烟 道書を読む

何年か帝都に住んで、世俗にまみれた生活を過した。

帰国してからは城北の無何有荘で病の養生をしておる。

夏になって程なく、青桐の下の木陰は清らかで、

茶のけむりが昇る床几に腰かけて老荘の書を読む。

閑適の氣分に満ちた作である。

鉄心が木戸孝允と親しく交っていた事は、既に述べたが、鉄心が辞職した五月下旬には、孝允は、長崎の邪蘇教徒鎮
 庄のために大村に滞在しており、事終つて帰京したのは六月三日であった。（『木戸孝允日記』一）。孝允は同月十六日、
 三本木のいばらぎ楼で海鷗・（日柳）^{くさなぎ} 柳東・（梁川）紅蘭・（野口）小蘋（女流画家）・（谷口）靄山・熊谷（鳩居堂）・萊
 山・北条小松（伊勢華）^{さかえ} 萩藩と小宴に参加している。その日の記事には、「今日、北国の報来る。其苦戦可_レ思見_レ」
 と、北越の佐幕軍に官軍が苦戦している状況も記されている。この小宴の席上で、孝允は海鷗から鉄心が朝官を罷めて
 帰国した時の様子や心情を報告されたのではなからうか。そして、鉄心の近況を海鷗に尋ねたりしたのである。海鷗
 はまた、そうした事どもを鉄心に報知したのではなからうか、それを受けて鉄心が孝允に寄せた詩が「干令木戸孝允参
 与に寄懷す」（『遺稿』別録）であらう、と考えている。

雁魚何用叙寒暄

雁魚 何ぞ用ひん 寒暄を叙するを

事至至情難写言

事の至情に到れば 写言し難し

兵馬東州捲余焰

兵馬 東州に 余焰を捲く

丹衷一片此間存

丹衷 一片 此の間に存す

書簡で日常的な挨拶を述べたりする事など、どうして必要があろうか。

とは言っても、のっぴきならない懐いは、簡単には書けないものです。

今でも東北地方では佐幕派との戦争が行われており

私は衷心からその事を憂えております。

孝允が「鉄心は全く音沙汰がない」などと海鷗に文句をつけたのではなからうか。それが鉄心に伝わって、鉄心は、国を憂うる心を抱いている事は変らない、と孝允に対して近況を報告したものであろう。特に大垣藩は、家老戸田三弥（権之助）を総督として今でも東北諸藩の征討に出兵しているのであるから、鉄心が戊辰戦争の成りゆきに熱い関心を寄せているのは偽りではなかったらう。

七月十七日夕方、孝允は、海鷗と約束があり、「障岳^{アサ}亭^{アサ}」に赴いた。同席した者は、江馬天江・長松文輔（秋琴）・佐久間甚之介であり、「萊山主人、頻に周旋す」（『木戸孝允日記』一・明治元年七月十七日）とある。海鷗は、この日にも鉄心の消息を孝允に伝えたであらう。

七月十九日、新政府は、京都の河東操練場で、戊辰戦争における官軍側戦死者の大掛りな招魂祭を実施した。その墓は東山靈山に改葬された。『三百藩戊辰戦争事典』上巻三四四頁を検すると、大垣藩の戦死者は七月一日までに四十一名ほどが数えられるが、これらの霊も祭祀にあずかったのであろう。この事を知って鉄心は、「吾が大垣の兵、従軍戦死する者頗る多し。時に聞く朝廷、身を王事に致す者の為に塚を洛東に築き、大いに祭典を修む。喜びに堪えず、此を賦して死者の幽魂を慰む（『遺稿』別録）を詠じた。

致身王事豈其非

身を王事に致す 豈其れ非ならんや

唯恐紛紛世論違

唯だ恐る 紛紛として 世論違ふを

一自君王創祭典

一たび君王の祭典を創りてより

沙場白骨亦珠璣

沙場の白骨も 亦珠璣なり

朝廷の御用に身を粉にするのが、どうして悪かろうや。

なのに世論が頻りに異を唱える事をひたすら恐れていた。

天皇が官軍の死者を祀る儀を創始されてこのかた、

戦場に暴されていた我が藩の兵の白骨も、宝玉として輝く事になった。

佐幕派であった大垣藩の藩論を、一朝にして勤皇論に翻えさせた鉄心としては、徳川の恩顧を長年蒙ってきた藩の人々や世間が、佐幕軍（賊軍）の征討について反対論や同情論を唱えたりするのが気になる所であったろう。しかし、天皇が官軍死者の靈魂の祭祀を営む事を創始されたのは、当時には、歴史の評価を定める事であった。ここに到って鉄心も安心し、戦死者も公式に顕彰され、鎮魂される。そうした喜びがこの詩を作らせている。

八月十五日夜、鉄心は奥羽の戦線に在る高岡夢堂を思つて、「中秋、月に対して重ねて高岡哲夫に寄懷す」（『遺稿』別録）を作った。

秋風各処夢相牽　　秋風　各処　夢に相牽く

平賊何時為凱旋　　平賊　何れの時にか　凱旋を為さん

又是今宵一輪月　　又た是れ　今宵　一輪の月

別来看及八回円　　別来　看及して　八回円し

秋風が吹く頃、奥羽と大垣の双方において、お互いに夢の中で会っておる。

君が賊軍を平らげて凱旋するのは何時の事であろうか。

またもや今夜、満月が昇っているが、

君と別れてより八回、満月を見る事になった。

結句は夢堂が一月に東山道鎮撫軍の先鋒の一員として征討の途に上ったので、かく言うのであろう。

六月中旬に彦根の清涼寺に帰っていた雪爪禪師は、九月にまた京都に上って来た。木戸孝允は、九月二日に「雪爪禪師ヲ訪ヒテ、小酌閑談シ、図ラズモ数刻ヲ移ス」(『木戸孝允日記』一、明治元年九月二日)と禪師に京都で会っている。たぶん海鷗あたりから、この禪師の入京が大垣の鉄心に報じられたのであろう、鉄心は禪師に「雪爪禪師重ねて京に入るを聞き、遥かに此の寄有り」(『遺稿』別録)を寄せた。

聞説徹公飛錫頻 聞説くならく 徹公 飛錫頻りなりと

春來三度入京闔 春來 三度 京闔に入る

知麼林下帰休客 知るや 林下 帰休の客

養老山陰有一人 養老 山陰に 一人有るを

聞く事には、禪師がしばしば旅行されていて、

春から京都に三度入っていないさると。

御存知ですか、田舎に退隠した者が

養老山の北に一人で老年を過しているという事を。

あたかも自分の事を忘れないでくれ、といった按配である。養老は、勿論、地名と老いを養う意とを掛けている。

（とくだ・たけし 法学部教授）